

妾宅の軒に浪うつほりかな

○拔花重箱

物日紋日の全盛うぶ揚の内に花に行迄拔花とい、揚の日又揚賣て二重になるを重箱といふ

住吉へ卯の葉かさねや十日笹

○酒

石部金吉金兜で丈夫にかまへしもの、ふも半點の朱唇に見とれてハ口に涎をなかし一杯のんだけんきハ本性のやどかへと出かけ下戸のたてた藏もなしとくらやみに迷ひ出したちまち酔て泥のごとく罪もむくいも後の世も忘はて、ぞおもしろや

○いやみ

役者にどのづけさまづけしたる。十日程いて江戸詞。遣ふ三味せん箱鏡袋の裏へてんがうかき。ちんこ芝居の物まね丸裸になる男自慢の仕打。かしこがり太平樂あはぬ詛子で哥うたふ篤實がり紙入の中へちりめんのかたぎぬいりたる

當時流行

女醫者 女髪結 汐ぜの袋物 ちんこ芝居 茶屋のとく實 代參の行者 我光わけのゆすり 拳 欄間こしらへ
たすし店 格子さきの手すりを立派にした置屋 店ふくろ棚をはりこんだ扇店 なんば新地の判官 黒出の八丈
嶋 春日野 三笠野 號たる安膳 渡邊筋のほし店 布手店 今に絶す大師廻り 一世一代のうそ 新町のみせ
つき こうとうな金持 芝居の根本

粹言

妙 有がたい 中 腹 なんとらかたら 有づめ 花の ゆすり さむい 神國 きつしり やれ やれけつこ
う チヨン さつする所 みそあける 筋右衛門 のめす ちらべ ちのを 出し物 ありくとありそふなことをい
事皆 逆鱗 心配 美
然り
すべて粹言ハ何ときはまりたる事なく只時に應じて工面するといふをめぐるとい、又壹文もないといふを二文も
ないなんといふがごとし

せんぼ

多く手摺のせんほをいふ すすりとの操の樂屋人形つかひの事也

あほ 金太郎 四郎 目 鼻 一 二 三 四 五 いたこ 銭太
女 下女 こと 新 男子 女子 風呂 酒 後家 美 助
るい 事助 四郎 止る 男 娘 婆 坊主 侍 菜 味噌 餅 火日
く 月代 寝 止る 男 娘 婆 坊主 侍 菜 味噌 餅 火日
金 笠 自身 其外 左平治 三四郎 六ふく かまる なんとよく 人の知る所也 此せんほの
多き事かぞへがたしことくくおらぬをかたせんと言

通

粹のあづまなまり也 近年大坂にて通言をはくこと流行

妙で御座す 馬鹿らしい とんだ事 おやく さいいき さいがへり うぬ とうたらしいのなんたらしい
大明神 赤本によりてさるべし

漢語

足下 公同 拙れ 野鄙 美 醜 愚 風韻 雅 盃 酒 煙管 煙
草 醉 阿堵 知己 佳肴 下物 青樓 茶 登樓 茶屋 賣人 社中 豪家
金も 豪傑 酒店 書林 鰻 鱈 河豚 麵店 錢湯 庖丁 家 周章
おど 奴 放蕩 篤實 俗人 不幸 蕎麥 僕 借老の契 閑暇 周章
はつたなし 此くらいまでのことへゆるすべしいつこう學者流の漢語遺ふなどつかふ

虚實柳巷方言 中終

虚實柳巷方言 下

人は四そじにたらでこそとへせいのない兼好が詞ながらもせめて七十ぐらゐる迄へとおもへども五十ぐらゐる迄へど
うぞこぞ人つきやい色事まじはりも出来なんその程を過ぎてはそろ／＼はもわるふなり目には目がねさんまい
流行におくれ若ひものにとまれふり袖のきかひしててもあいてにもつとめにくしほれたせりふほうそらしくあ
りやうでハ氣の毒也金づくといふ事がせうで見へてハおもしろなし何のために灸すへて養生して長いきしてあら
たのみすくなの世界ぞと行末をくりす若ひとときの不了簡一日花柳の酒をのまねバ口の中にかびがはへ東口の
とらやの店さゝで戻ることあれば引ふね仲居がどうぞ申が耳のそこにはざかまり今時分からおもしろざかりじ
やがと思ふ程一足あるけバ二足つゝ跡へのこるもぬけ心我家の内でのひとりねにハ夢斗りなる春の夜も山鳥の尾
の長たらしやと生れついた朝ね好も夜のあくるまぢかぬるハ安樂世界の味を覺へたる故ぞかし 太夫ハ

西扇	や	玉井太夫	長哥太夫	長門太夫	初紫太夫	千町太夫	哥姬太夫
東扇	や	花扇太夫	壽太夫	姬琴太夫	花崎太夫	司太夫	緒環太夫
		八重紫太夫	小式部太夫	庄山太夫			



樋屋

浮橋大夫

繪合大夫

金吾大夫

櫻木大夫

龜菊大夫

橋立大夫

紫野大夫

折琴大夫

萬代大夫

初倉大夫

玉萩大夫

茨木や

長門大夫など至て國色なり

瓶子や

○天神に

扇や

萬大夫

梅きく

大丑

玉琴

さつきの

松枝

東扇や

綾絹

大道や

東雲

辰巳や

あづまや

ひなつる

初むめ

わた長

ひなつる

へいしや

駒の、

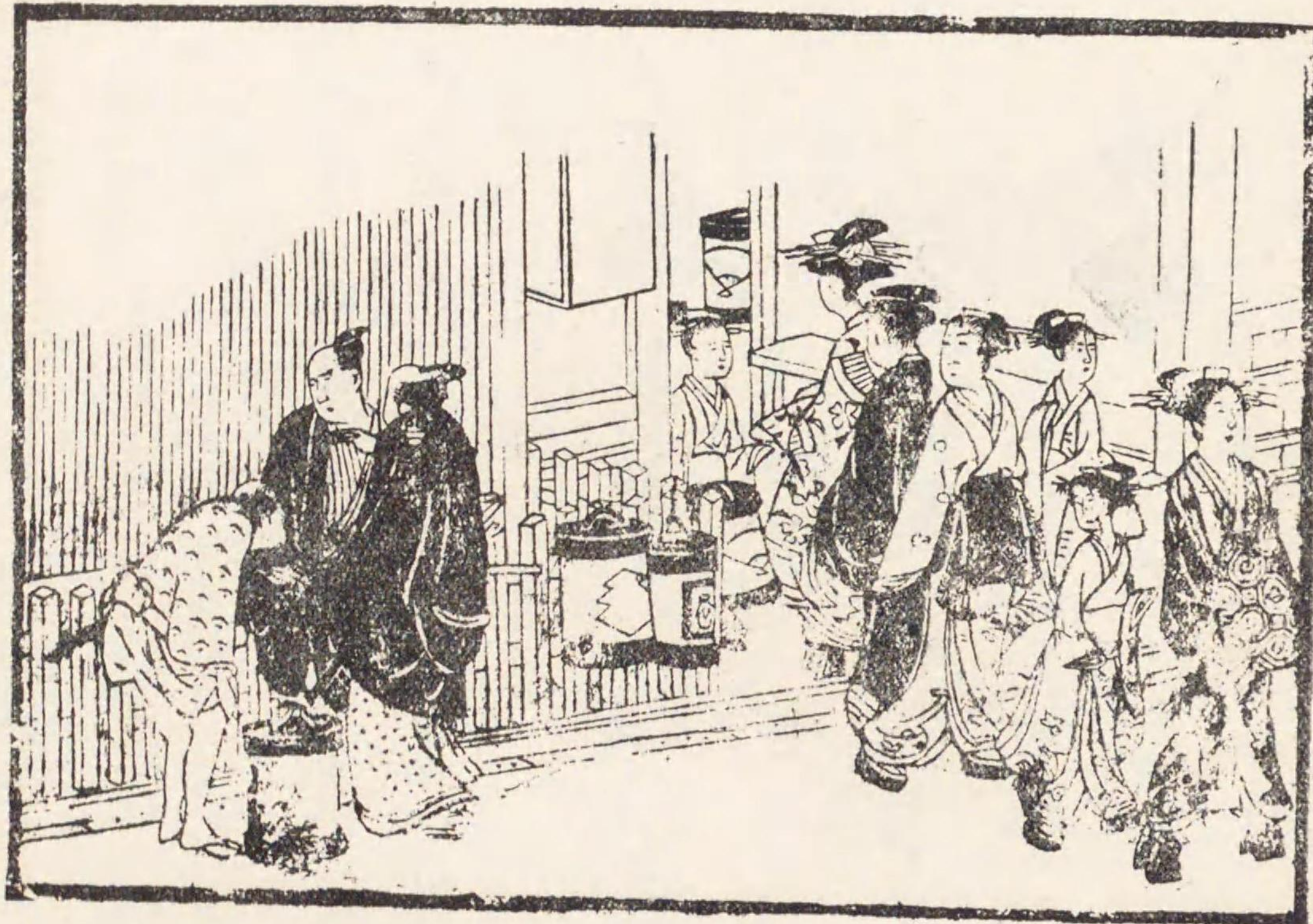
駒絹

丁山

一柴

ひなつる

三扇



大坂や

大きし

八重きり

やどり木

茨木や

小井筒

とこよ

いづ半

一柴

錦木

記平

とよ橋

花町

近江久

おだ巻

文車

花紫

上村や

賤うら

むさしの

○げい子

折や

おさ、

かいで

きく松

扇や

さかへ

民の

千とり

この

小べん

しけ松

ふせや

ぬい

ぢう

しけの

千草

市松

よしや

眞砂

龜つる

ひな松

いばら木や

若松

大三

小いそ

虚實柳巷方言 下

ともへや ますみ そめの 志ほり
さかせ ことじ この もとの

○たいこり

いせや 忠藏 稻吉 淀吉

いなり店 辰八 多八 つる吉 忠八 萬吉 名八

○法師

琴はし 小の都 きよ都 くま都 長尾

○飛脚

紀孫 すいきや

○揚屋并挑灯するし



○揚屋并挑灯するし

 吉
 湯
 大和
 永
 井
 三
 永
 永
 井
 三
 永
 永

○茶屋

天吉	木本や	京善	住八	よしや	大重	古はしや
きの新	たかしまや	折や	河吉	さか興惣	住藤	上村や
松尾や	筒井	上林や				

虚實柳巷方言 下

太夫

秦の始皇の雨宿りに松に給ひし位を以て稱し奉り凡川竹の身の隨一にして美形また喩ふべくなし風にいたむ楊柳のすがた雨を帶る芙蓉の顔琴をたしみ茶をたしみ氣せう高く人がらよく全盛の時を得て鳥が啼吾妻のまろうとふらぬ火のつくしのあきんど迄居つゞけのうつゝをぬかしのゝさまの草鞋をみやまおろしの山吹かそらにふられぬ雪とぞ降らせけるそ

天職

むかしハ大天神小天神はし天神とて三段ありしが今ハ一樣になりぬ諸分も手管もいきはりも禿たちより心得て萬古格を失ざるを廓中の味わひとす沉魚落鴈のすがたありてみる人こゝろを空にし魂をうしなふべし

新艘

禿より仕込出來あしきハ追まはしのこめろにし中なるハ端女郎よい所を天神とし至てよい所を太夫とす櫛のすそさばきかしぶりのすりあしハ文字の道中くり出しのうけあゆみ草履ハ見すにはきむかふからくる人をよけず三

伏の夏の日も鼻のさきへ汗かゝぬまで習性となりて外さにとに及ふべくなし

禿

七八ぐらいから坊主あたまにすがほの口へにあざぢりめんふりそてもゝいろぢゆすの帯でそだてられくるハの外ハ夢にも見ず芝居など決してふらぬ者なりしか近年市藏がどうたら政吉と何たらとかわつた事を覺へたりされどもはやり哥はやり言葉いつでも遅くボヘン買ふて貫事と三年ほどと南ではやつた哥うたふて歩行事とを樂みとす

引舟

新艘太夫の出るときはいせうのある引舟をつける事也新艘の間ハあたまの道具からはきものにいたる迄よろづ引ふねの世話になり諸分手管も魂膽も引ふねが教る事ぞ新艘進退の指揮を司るがゆへに引ふねとハ名づけたり黒志ゆすの前帯すがほのなけふまだにて色事黒人の悦ぶ事也

花車

花車はやり手也五節句神事物日紋日など出るにもむかしハ赤前垂にてありしが近年桔梗の前垂とかはる外さにと

て花車といへば置屋の女房也廊中へさすがに物の大やうに太夫天神引ふね禿の諸事とりきまり花車次第にておやかたがとりきまり折かんなどする事決してなし

見せつき

鹿戀なり通り筋にばせう富士松徳きしや明石や阿波座にはり六ふしみや越後町に京とら□平今平川又なんど聞及しのみお記す又見せつきの諸分あり太夫天神にてさしかへといふを見せつきにてはあがると言またつき合どまりなど言事ありて色々せりふなど有事なり

おくりこみ

店つきやを店やといふ店やからおくるも有又おくりこみばかりの家有呼屋にハ川市池もいづ彌いづ勘河彌置やにハ折徳綿長近江久すみ伊

わけ

杓子掛はとべやとも言諸分ありといへども志ばらく筆をさしおく

きも入

八百甚 丹長 高津平

鳴々名物

ほりゑなん地の茶立女嶋之内の垢摩女中色しろくうるはしきに茶に酔て家が舞ひあかを落して腎虚する若ときの
新造買連中口々の品定をなま覺へにかき出してひとしき友をまつのみ

○嶋之内

京井筒	かほる	さが	みとり	くが	ひなじ
河おと	よの	もしほ			
濱河音	うの	さくら			
薬師ふろ	玉ゆり	木々	みつ花		
いせや	らい	いせ			
京治	あや	もしほ			

森 新 さきの
いせや もしほ

戎風呂 あいむめ
新大こくや もと

三味り やくしふろ しめ 近江や さもん

大坂や 礎柳 當時の三ぶく對三曲の達者也

近江や おとめ

大坂や あや こま この はし

金澤や この れん あや

東 や 市松

一文しや こう

森 作 小朝 小しほ 金吾

もり新 ゑん いま

吉文しや あや

河 おと きとら きの

新大こくや てる いそ

京扇や 小でん とく

つる井や 大 りく

法師り ふじ永 みね崎 おとしま 廣はし

飛脚り 阿波源 近江嘉

かごまゐるしは



役者ほうしかけのあるときかこの衣裳もの好
みはれを盡す事也

宿房 河作 あしろや 貝半 川庄 秋忠 とん市 いづ勘 ひし惣 岩善

白人 人

白人とい白人といふこと也嶋之内北之新地にて名物とす大坂の富貴こにとどめたり太夫の美なるハ櫻にひとし
く花の王にして雲上にけだかくものかずいわず春の夕邊のかねの音にちどけなくもちりかゝるながめにも似たら
んか白人ハ牡丹の花ならんはでにしてちやんとしてとりわき花の富貴なるものにして名にたかき判官の露をふく
む花のもとにたわむれはなれがたくもよりそひてねむりをよほす有様にも似たるべし

○道とん堀に

もり新 せつ しも ふし善 高まど たつみ 小むつ

三味り もり新 くみ 小ゑだ 小よし 幸 ふし善 あや

宿房 大七 一文しや 松本や 竹庄 住孫 角平 扇さよ 河しな てし六 兵庫や 新や てし久

柳や いせ春 とん七 吉辰 よしあけ 鳴門や 紙勘 木作

○坂町に

西大彌 ひな いくしまや もよ

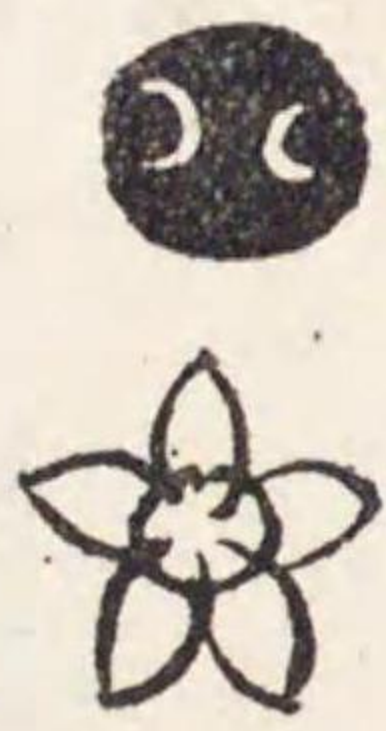
いづ梶 おの 東大彌 かほる はならい

虚實柳巷方言 下

山田	や	かの	あや	備	重	いち	こと	うの	千町
さの	や	なか	さと	こい	せ	い	を		
大	藤	とみ	あさ	くみ	いわ	さ	小む	め	
戎	屋	そま			播	菊	金	吾	
大	村	あさ	いづ	み					
三味	の	備	重	り	せ	ま	き	み	ち
こ	い	せ	みつ						
天王	寺	や	市	松	若	松			
岩	佐	せう	玉	也	妙	々			
戎	や	小	ひ	な	秀	の			
大	茂	萬	代						
舞臺	子	の	關	東	屋	稽	古	場	雛
吉	藏	小	太	郎	吉	次	郎	芳	三
									郎
									駒
									太
									郎
									金
									藏
									德
									次
									郎
									國
									松
									つ
									る
									吉
									寅
									三
									熊
									吉
									熊
									二
									郎
									菊
									三
									郎

辨慶の 藤川店 菊八 八兵衛 八十八 藤八
 龜 井 百七 東吉 米吉 大吉 江戸吉 床吉
 つる 井 萬六 エンテイ 權八 利八 松八 善八 林八 正八 音八 嘉八 ゴンテワ

かごしるし



宿房 難波菊 大吉 新直 さつ源 金伊 丸七 泉勸 東 大吉 よし佐
 舞臺子 小鳥飼の粹人になりたるのいつでも鶉を飼ひ傾城買のさびのつきたるの舞臺子を愛する事御定り
 なり衆道の高野大師の流をくみ眞言宗の智識の宗も黒ひ羽織に黒頭巾で仲居壹人つれて店へ見に行さらに人に耻はす
 すなじみが出来ての變生男子街賣女色をふりすて、専念専修の執着心若衆の念者に心切なる又女色よりの甚し

○堀 江

鹽 辰 ひな
 岸本 や 志のぶ 叶
 大 伊 萩の花 よしの

丸よ ね 岩崎 さくら
 さ、治 ゆり
 明 利 かしわ木 都 高雄

かし喜	ふね	木津安	かなめ
よし國や	九重	よし佐	いと
いづ義	さく	あみ治	あさ
あま此	さこん	さかくめ	ゑい
京庄	きのの	なご傳	小しほ
いよ新	あづま	ふし利	みね
あみ利	とき	若くら	あをば
三味の	かじ松	百	琴三味せんに達し甚妙也
油利	けん	又妙也	丸利もよ
木津安	小まつ	瀧林や	らく
いよ喜	さく	なご傳	せい
もり次	くら	大その	より
よし國や	たい	魚も	おと
京半	いし	あわ利	のぶ

ひめ松	とく	ばん長	小きく	くに
嶋此	大吉	大伊	もん	小ゆき
米せ	いと	たゞ半	市松	のぶ
いづ儀	りきの	京庄	てる	
さゝ治	萬代	ふくも	市松	
尼平	いわ	ひしや	ついで	
尼太	さき	京武	あう	
蓬や	こう	たゞ忠	とき	

辨慶の 梶店のせ八 澤八 三八 大津や 彌吉 大津や 土來

兵金 桐大夫 善七 卯吉 大八 玉川 太吉 彌八 百助 善八 礒八

法師の むらすみ 琴はし 常とみ せうきく

町飛脚 おの久 近江や

かご印 ⊕ 永花平

宿房 　いづ喜 中つね 龜ぬい はり松 大嘉 河棍 河庄 中津や 中興 河伊 くらまや 八久も

蓬や よし喜 菊川 いせ巻 備とみ 丸木や 大仁や すし久

○難^(應) 地

新	や	みよしの	みき	しけ	たけ	さくら	ちか
たば	新	小とみ				いづ平	小そで
きく	新	いせ	はな	もしほ	さくら	升つる	きの
いづ	喜	たけ	さきの	かほる		あはや	まさの
京	平	きぬ	しづ			いづ松	さき
萬	徳	いち				よし安	さくら
天	庄	まさの				河きの	むらじ
三味	の	新や	こと	その	ふじ江	小べん	小きん
						かよ	金吾
							天とく

いづ	平	しかく	まれん	こう	こと	大吉	春江	ことの	小むめ	小まつ	あや	やす
きく	新	萬代	せんよ	まち	さく	とき	こと	せい	おり江			
天	庄	庄吉								たば	新	すへ
河	ふ	じ	小ふじ	きくの	つる	せんよ						ふく
河	きの		ことじ	かじ	とりう	小いと	いま	龜松	ことへ			市松
いづ	喜		のぶ	若松	とく	小吉	いづ松	ふじの				みよの
萬	徳		うの				つのせ	しけ	すへ			しけ
辨慶	の		藤川店	一八	大八	兵八	浅八	龜井店	忠吉			

かご亥るし



宿房 　茨木や 橘喜 はり吉 さか文 柳や 下駄利 龜扇や いづ安 あは菊 よし志け 京伊 鯛喜

大伊 　さか治 いづ喜 こい林 八百龜 わた長 油藤 鎌しほとん伊 大卯

○北の新地

大 半 もり まき 大 吉 てる そな

てした	らい	ちよう山	てし與	なか	やを	つる
河平	あづはた		八木や	八木		
金秀	こと	しば	河忠	ゑみ		
高田や	この		河庄	さこん	小こう	
かべや	にしき	はつ	大ふさ	よしの	哥柳	すが
木長	あづま	なか	鹽せ	九重		
いづ國	かじ	小竹	河平	しゆん		
三味ハ	てし太	すみ	つのとく	ゑん	ふじ江	
有	大若松		大吉	つね		
あはや	かめ		京半	小むめ	ふじ江	
大太	大こま	やす	山卯	ちう		
いづ新	小さと		八木や	金吾	ちせ	
大安	せう		大半	たね	金秀	いわぢう
大榮	すへ	きの萬		小いと		

きし本や	この	小ひな	たく	いづ國	市松	まいこ	小いと
大ふさ	くの			扇さと	むめ		
丸伊	なる			ひし富	くま		

辨慶ハ

東店 萬藏 與市 九八 直八 ゑ吉 さが八

法師

西店 十九 上人 たしなみ 小儀 よも八 衆八 嶋八 與八

飛脚

わか山 長岡 村すみ 淺都 雛都 音都

かごゑるし

福田や 天利

宿房

河佐 三丸や 住治 河久 大吉 花喜 丸新 いづ平

たすみ

天花 大榮 はり源 小松や 戎此わ

○馬場前は

大彌	みやこ	その	大吉	ぬい	あや
もり新	おぎ	小さく	金源	ぬい	
大しな	よしの		大庄	よしの	しば
					せい

唐金や たけ さい

扇 紋 らい しば もん

京 石 はな きく

京いよ せい いその かね

大 宗 龜

三味ハ 唐金や さき すへ

大 彌 まち みき とみ

森 新 まつ

大 庄 いくよ ゆき 秀吉 市彌

平 萬 まつ とも

かな 源 萬代

大 吉 もん 床吉

こま 武 さだ いし こう

大しな 小吉 ひで みよ

京いし たか みつ

京いよ つね さい 大吉 かし

辨慶 大谷店 與八 熊八 嘉六 仁六 涌八 西店 みね八

法師 菊嶋 とみ岡 常さだ

飛脚 近江や

かご挑灯ゑるし



宿房 さの吉 辰蘭 櫻とよ 河源 東山 いづ直 近梶 京吉 京たみ ひし熊 河さつ

粹家人物品定

遊女

うきふしちけき其中にもこゝかしこの呼屋から人ばしたて狀壹本かく間のない全盛あれば晝寢せぬがちの同じ册
輩の給仕まてする御茶引通しもあり呼屋の天井の天井うらよ(此ノ所五字抹消)老妓あれば呼やの内へはいると上氣する
新造ありなめくさりてもくびで賣けんきもの不器量でも(此ノ所三字抹消)賣前帯たばい過した浪人の娘出ハ詞の
ひつはなしになまりをだしに御所出しやとて御客を御前さまと稱し三日ほどてた天神おちがどうなんかもす
さましく三丁めにて白人おちがり哥仙さんとなじみであつたもちつとづ、ハによりの事のき、はつり也なんに
もせよもとひひとつとうふやの娘紙屑かいのいもとなかいのほぐれこしもとのぞけままい焼出されあればおい出
されものもありくひさがされの下女の果役者につつた子もりのままいが此内へおちこんでひかのこのわけく、り

にまつかねの匂におひをふくませ遂つひに着ぬ八文はちもんのふりそでをかいどりつましての新造しんぞうが玉たまの輿こしの出世しゆつせするもおかし
藝子げいこ

ずつとざしきへ通とつてみなあらぬ顔かほが揃そろいさかなはさむとはじかみのやうな手てしてうける客きやくなど、來くるとくつと
たかふとまりおしそふに一寸ちゆんあいさつしてそれからいめんめらどしのはなしになり「此間このま吉きちさんに逢あてな」フウ
としてじやあつたへ「どうへにるやりしやいな」そして中ちゆうつねの方かたのせりふはどうじやいな「其間そのま客きやくハ始終しじゆう
てれている三味さんみハつぎながらいつ迄までもちようしあへせてゐる中ちゆうにも五年ごねんもあとにたつた一度いちどほどきてよんだ藝子げいこ
の名なを覺おぼへていて「おまうといふふりそでのけい子こめハこんとハエロなりおろなあともつかむやうな事ことい、だ
せバ大おほがいかてんがいつてもいかぬかほ」ねつからぞんじませんと言いい、まためんめらどしのはなしになるか、
が「なんぞひきんか」とさいそくするのでやう／＼「さればその事こと今いまさらにか引ひかけるこうした所ところでハ一いちかどの
藝子げいこかとおもはれるがあいての客次きやくじ第だいでサア青あおひ藝子げいこがつけたしてハ松まつ盡つくしのぞめハ大黒だいこく舞まひをひく出口でぐちの柳やなぎとい
へばこ、ハ志こころまばらとうたいかけ二文にもんが直打ねうちもなくなるものぞかし

牽頭持たいごもち

むかしハ客きやくより花はなをあたへ線香せんかう花はなといふ物ものなかりしもうたぬによりてならぬやうになりやぶれ大おほこのひわれ聲こゑで
物ものまねを一つたつ酒さけのんで拳こぶしさへうてバ大おほこもちじやと心得こころえてめつたむせうにやりまして南みな近ちかくハなんぞとい

ふと舞子まこそのけに舞まかけるまづ不れつ了けん簡かんなるべし物ものまねハにるがよく舞まハ下手へたながましなり

かり子

竹たけのつ、をこしにさしさみせんはこかたてにさけながらまめのはをふくらかしてあるく男おとこさへ見るとおつさんと
い、あどない事こといふかとおもへバけしからぬませた事こともい、犬いぬのねているをめつそうこハがるもおかし

事とす

まのし

かりにいてなじみの客きやくが手てをとり酒さけ壹いちツのませて藝子げいこが小杉こすぎにさかなのせてやると内うちへいで百貫目ひゃくくわんめも遣つかふたや
うな顔かほしてふんまいのまはしをおいまはす氣性きせう也

大おほこもちまのし嶋しまにて色事いろことする事こといましめたり又またきせうのひくい大おほこ持もちが置おきやの鼻はなたのみ松屋まつやの顔かほかつて羽は
織おりを買かつてゆするまたはきせうのひくいまのしハおやまけい子こにつるせういふてか見袋みふくろの古ふるいのをもらいた
め帯おびにしてゆするあり

仲居なかい

南みなの仲居なかいはなやかなり廓中くわくちゆうハおとなしい給銀きつぎんの外ほかにもらいありて身分みぶん相應おほりあよりハ衣裳いせうはでにあたまの道具どうぐも一いちか

どの直打のものをさし肥ぶ、で酒をよようのむを悦ぶ仲居すきの客おゝくあるものぞかし置ばんのあけの日まぶにあいに行事也

法師

眞一文字に三弾をよこたへ長うたの一挺弾はちあたり聲のさびが直打なり藝子が色事またかるもひきづりみつちや坊主あたまにほれるでいなしなんぞれかぞれ徳つける分別も又にくむべき事にあらすいづれすへゝのかす都といへども聲ハ男の事なるべし

廓中諸分

○かしかりといふ事廓中のならひ也

○太夫あけや入に引ふねかむる傘もちつき天神にわかむる斗つく也

○さしかへの夜太夫に引ふね禿つきそひ限を相圖に禿を戻す事也

○さしかへの夜客歸る事ありても太夫ハ揚屋にて引ふねとねる

○さしかへの夜の衣せう手どうぐハ勿論夜具までも太夫のかたより持來るむかしハ車長持にて夜具を送りしが勝手あしきゆへ今はふるしき包とかはる

○揚屋の客枕ハ太夫より我紋と客の紋と蒔繪にしたる枕を送る

○太夫仕合せして門出するときの響應ハ大盡の方だひにて一世一どのはれを盡す事也

○式日あるいは新艘の出る日よびむかへの女とて女郎壹人に仲居壹人つゝむかひに出る事

○廓中女郎いかほど念比なる人にもいかほど大事の客にも途中にものいわずもし客を見つけたるときハ引舟か禿の内壹人ハ客につき揚屋返おくり行太夫ハ我行方へ行て事すみて後揚屋へ逢に行事也

○とゞけ文とて外の茶屋揚屋より呼にくる事あればもとの茶屋揚屋へ文を送り返事次第にて行事也

○扇やの夕ぎり文をかりにやつて初心の客に見せる事

○くにくの客歸國の時の餞別に太夫の文をあつめこれをみやけとす

○揚ハ太夫六十九匁天神三十三匁藝子二十七匁揚屋そう用八匁茶屋そう用六匁

○花ハ天神四匁三分けいこ三匁

○呼立ハ揚屋と揚の出である太夫外の揚屋よりかりに來る事あるときかしに行てひまとなる事あれば揚屋の子めろ呼立に行事にぞ譬ハ、賤はた太夫さあ禿しゆよしのくくくいはしなよしのをさなへなどいふ太夫名一聲禿の名五聲引舟の名一聲と定たり

かしましましやいぬにしておけよぶこ鳥

手管

きみが手管に孔明も楠も降参々々

はり

くるへの法にそむけた客へふつてくふりつける

いざい

家藏もうちこんで勘當の身の鳥威しあみがさと紙子一くわんのすがたにも喜左衛門が心切太夫の情へ誠をもと、
するくるへのいきじ有がたし

にし

新町をさして西とよぶ西方極樂の有難きをおもへハ蓮生のうたに

極樂に功のものとやほめつらんにしにむかいて後見せねば

惣揚

大夫を初すへくの鹿戀わけにいたる迄揚る事にして四方の門をうつと言ひ

流の身 川竹の身 苦界

夜毎にかはる浪まくら新に出たるを新艘とい、せやくを引ふねと言

けいせるハ弘誓のふねのわたし守(此ノ歌下ノ句抹消)

文

翌の日の禮狀新艘のたのみ狀やくそくのかたもの日もん日のたのみ狀うらみ狀りんき狀り、このつりはりにお
とかいをかけられて君が面かけわすれす御定りのあぶら狀に夕かたちこく行氣になるもおかし

きせう

雀の血にすゝをまぜて血文とし鳥のはねで指こしらへしこんたんも昔にて指きりかみきりきせう誓紙などの遅
きせんさくハ今ハたへたり

水あげ

姉女郎の客をたのみ十日廿日三十日の日柄を客にく、りつけあるいハ姉女郎朋輩などよりも身分相應日柄出てや
る事也

全盛 松の位 きみ 太夫を格子とい、天神をみせと言

廓中詞

なんかなませんか なませんか あんた おひそな はいア あハア ちよとみな こちの 引ふねかむろ新ぞう ち
よとみんかいな とうで どうでござり ます おます 御座ります いつこゑ、な どうじやある 大坂やの と斗女
内の子や 郎どし

虚實柳巷方言 下

二七

あるいはよつほと念比 とうぞや 仲居揚屋のかゝをはじめ外の
 な人にでも途中てい言 ものも客を送りし特別れの詞 もしおちかひに 大門迄送りし 御もどり ことをいわず
 おゝいや なめくさり きらい 扇やの うげにくい いつこうだしい およろさんかた すかん つちやの あやま
 つた すべて廓中よびすて也さまの字つけべきはすの字つけてよぶ事也
 太夫どしあるいは内にも太夫の名を呼に何太夫とはいわずたゞ何大と斗りいふ
 なをのこれるを後篇に出すへし

粹道大意

凡粹の一字斗功德廣大無邊にして釋迦の教も孔子の道も禮義三千威儀八百も思い 邪なしの粹の一言粹の推にし
 てものをおしはかりおもしろいやりのあることにて人情に通じたるをいふ醫者どの、食傷と傾城買の人情にうときハ
 世のすたりものぞかし義理と忠義と孝行を缺さず女房も子も可愛かり下女もいたわつて早う寢させ丁稚もあはれ
 んで川水くませす身の行にこゝろをつけ家を治ることを第一とし三日の浴湯長いりせず五日の月代おびに結す
 太平樂の言やめてさせるハ毎日掃除すべしはこハ國分紙ハ半番衣服ハ奥嶋白ひたび十二本ほねの扇夜歩行に雪
 踏をはき羽織と扇必わすれずやみは桃灯ともし男遣ふ身體どこへ行とも供をつれつよがりは言わぬがよし金
 銀も身分相應樂む事も 樂べしきたなぶれた事をせずのめぬ酒ハ我のみせず古ひ口をはめ句せず親しい中にも算

用ひきつしりとするがよし傘下駄ハ早速もどしかつたものをひまいれずいんぎんすぎるも無禮也高いきハなをわ
 るし藝におほれてうぬになるゆすりすごしてさむなる傾城買の金つかひ自慢ハ色事仕の男自慢學文遣ひのもの
 しり自慢俗醫の手柄咄しうらやか、の茶のみはなしひつてんの身の上ばなし姑の十八六十の手ならひ猿のさる智
 恵鳥の鶉の真似いすかの替の間違了簡はやりうたもはやり詞もおやまけい子の身仕舞部屋に芝居淨るりの樂屋ま
 で覺へたりとて（此ノ所三字抹消）にして分ちりにあらず色事の世話も出合宿のこんたんも木戸の顔近付も置屋の
 息子と念比なも粹かとおもへど粹にあらず生れの儘の粹大盡野鄙な事ハ實にちらず河豚くわす密男せず摺物を四
 ツ切にせず哥ひらきをさらへ講の序またす立宴るときに始末せぬいくとしもく相替らぬ粹大盡ぞ有かた山のさ
 くら花と何をいふやらわけもなく永々しき夢咄しを春永に書納りし

虚實柳巷方言 下 大尾

解題

一 大坂船場順慶町の夜店は、随分種々の書籍により、世に傳へられてゐますが、この夜店のみを題材にした『順慶町夜店詠狂歌夜光玉』と題せる一冊の狂歌集が出来てゐますのは、當時の風俗を知るべき好資料の一つでございませう。

一 この狂歌集は、狂歌師如棗亭栗洞の遺詠八十餘首に、門人棗由亭負米が自詠二十餘首を添へて一冊としたもので、原本は天地五寸九分、左右三寸九分の大きさです。

一 如棗亭栗洞は、栗柯亭木端の門に狂歌を學び、寛政三年(我が二四五一西曆一七九二)十月十七日、七十二歳で歿し、墓は千日前法善寺にあると『浪花人物誌』に書かれてゐます。この人の詠に、『秋夕案山子』と題し

をどさるゝ鳥はのこらす宿とりて案山子ばかりの秋の夕ぐれ
といふ一首があるのを、記憶してゐます。

一 この書の開板は、文化十二年(我が二四七五西曆一八一五)で、丁度、栗洞歿後二十五回忌の追善に板行されたものらしく推測されます。若し此の推測が中つてゐるとすれば、意義深き出板物の一つとし

て、長く傳へられるものでせう。

一 この書の底本は南木芳太郎氏の秘藏本です。題簽の板下は、この書の編者聚由亭負米が書いたものでせう。

筑波の長きもの
かのさきへのあはれ
はるかにあはれ
あはれにあはれ

徒道を原へてはたかき
かたしは好く申ふを
と申すはたかき
しはたかき

かたしは好く申ふを
かたしは好く申ふを
かたしは好く申ふを
かたしは好く申ふを

心もあはれおぼえは
よりおぼえのわがまは
三浦の海に補ひて其
志は清きかつき存養

よこしをなほびつりあね
夜光玉と歌へ一篇とい
ねしぬ夜光のふりも
六神皇太后名物也

東初河忠子

前武者小路殿

親古堂

文化十二年

徹心院

亥の冬

後序

やると昔二校のあはれ神天のうた
たこれ浩にまぬさる世帯の店
のり河源島山乃きりう祭
よせとあさりまよりあやうき

とら死大者人あめり活者乃
 今まに志あるも初戒物云文
 拂のあやせして旅ひ業如白
 事ふきあむあむあむあむ
 順き甲とて舞ひあむあむあむ

波 せねああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ
 せああむいけあむあ

めんをいそめまへわれハ慣ひ
 かのものなほ福とせしに
 おへよほふなふもあはれ
 こゝの里さすの梓よかき
 是れはなほの歩旅をまじに

お歌さすの梓よかき
 かのものなほ福とせしに
 おへよほふなふもあはれ
 こゝの里さすの梓よかき

栗生坊
 由



とまやう汁

それといへいまぬけもなしに盛て出すおとり子汁のこれをきて見よ

煙草店

黒船や庄兵衛もなき新町の橋詰へちよといつるたはこや

雪踏店

うけ合のせつたとあれいあつ皮に一そく飛な直もつけてみん

長命丸店

床のうみ新町はしの帆かけ船長命まるとこれをいふなり

饅頭店

木のもとにもるてふ月の影とのみ檜葉のはさまにみゆるまん丸

八百屋店

酒のみのうき名に立し八百や店犬のよろこふものはなけれど

狂歌夜光玉

鳥 箒 屋

打よりてねきりこきりのほととぎすこの鳥箒かけねこさらぬ

瀬 戸 物 店

せともものゝ人にせかるゝたひことにわれてのすゑかあはんとそ思ふ

て ん ふ ら

世の中よ錢か馴染てあれのこそてんふら料理客はふらてん

飴 う り

人丸のそれともみへす久かたのあまきる飴のなへてうれるの

正 本 屋

直をさきへ聞ふかるかやわれもかうわれも買はふの草雙紙店

鹽 肴 店

生よりも能とすゝむるあま鹽もうまうの喰のぬからき世渡り



桶屋

賣こと葉たゝ安かれよ桶屋とのこをけらしうにまけといふとも

打物店

まけよくいそこをすつはりまけぬるのさすかにきれた打物やとの

麵類屋

何膳かうとんそは切かひれともあたいの錢につなきあらしな

太物店

みちおくのけふの細布おりかえてふと物みせの直もあひぬとや

下駄店

雨ふりてかゝる折に下駄みせを出すのもつらし出さぬのもうし

生魚店

くさつても鯛とはいへと生さかなよう津の市なら店の出すまし

古道具屋

漆の香ぬけたる膳をやすくとそのねころてのまけのいたさぬ

はつの身賣

天満やおはつと呼はつきりうりを花て送るといはまほしさよ

笠みせ

はつちやうのみつちや竹さへ晝よりの夜目遠目よくみする笠みせ

西瓜切賣

なまはづや切うり西瓜それさへも大船小ふねおしてゐるにして

手から餅

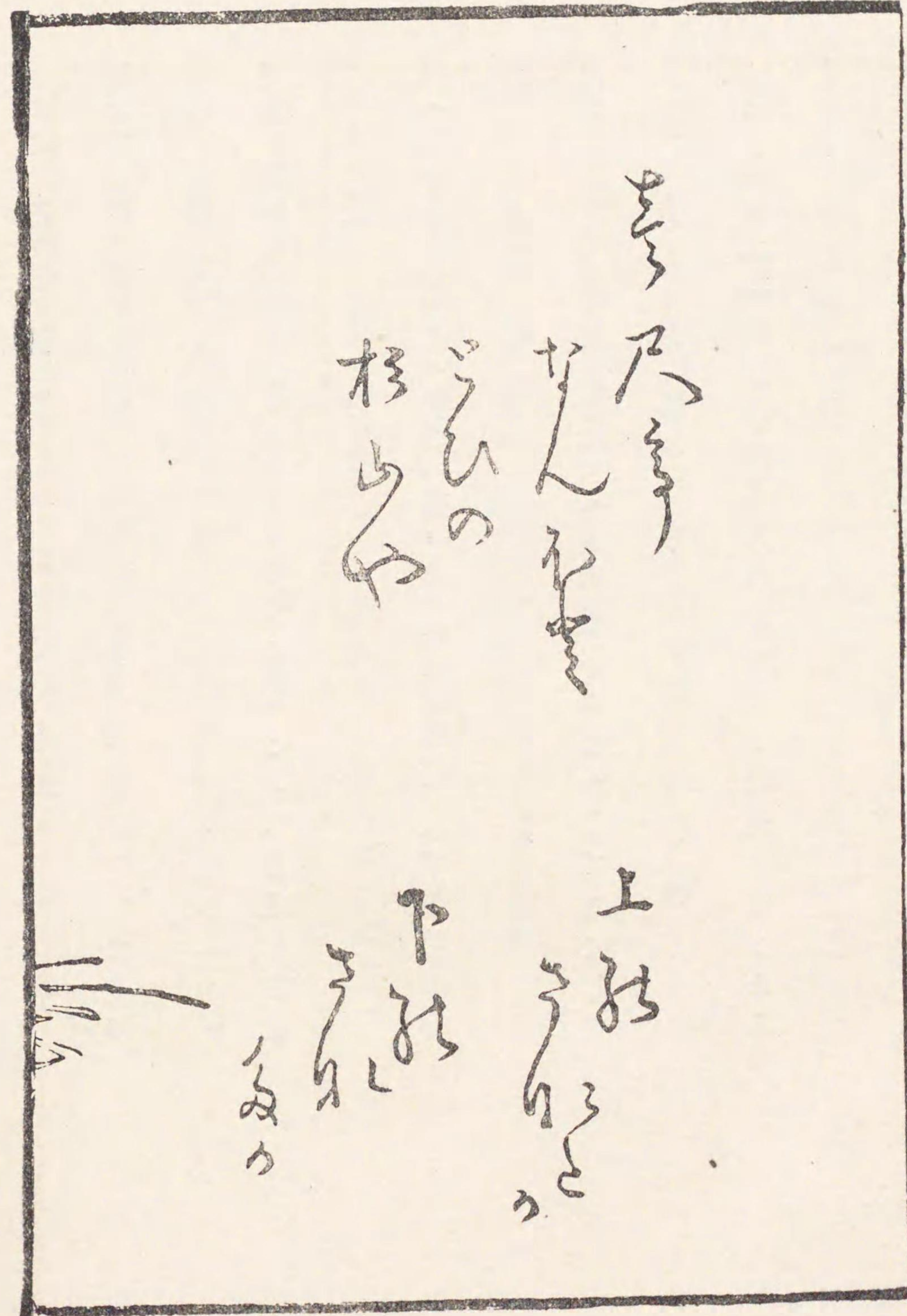
味のひの日本一かきひのもちひとつ下され先のこゝろみ

からかさや

定なきそらねとのみそ夕しぐれ日かさ雨かさうりみうらすみ



おき通



張 枕 店

賣やすく氣もはらさるや張まくらいつまろものゝねることもなく

かつら屋

高間山それのしら雲よそよのみ見ての通らしかつらやの店

錢 小 賣

菊ならてそろ盤におく露かねも壹りん貳りんかゝる兩かえ

十九文店

常盤なるまつのみとりやよりとりの色まさりける十九文みせ

昏 店

こゝもまた天の岩戸や八百よろつかみあつまりてうれる常店

鬢 附 店

春の夜の市のあやなし梅花煉色こそ黄なれ香やのかくるゝ

草 履 店

はなやかなはな緒も足も立とまりようはけるものそふりやの店

芋 賣

やかすとも芋の賣なんむしたてもたゝ好き人よまかせたらなむ

人 形 店

さはめきてくるのは近き人形みせおやまさんやらないことんやら

小間物店

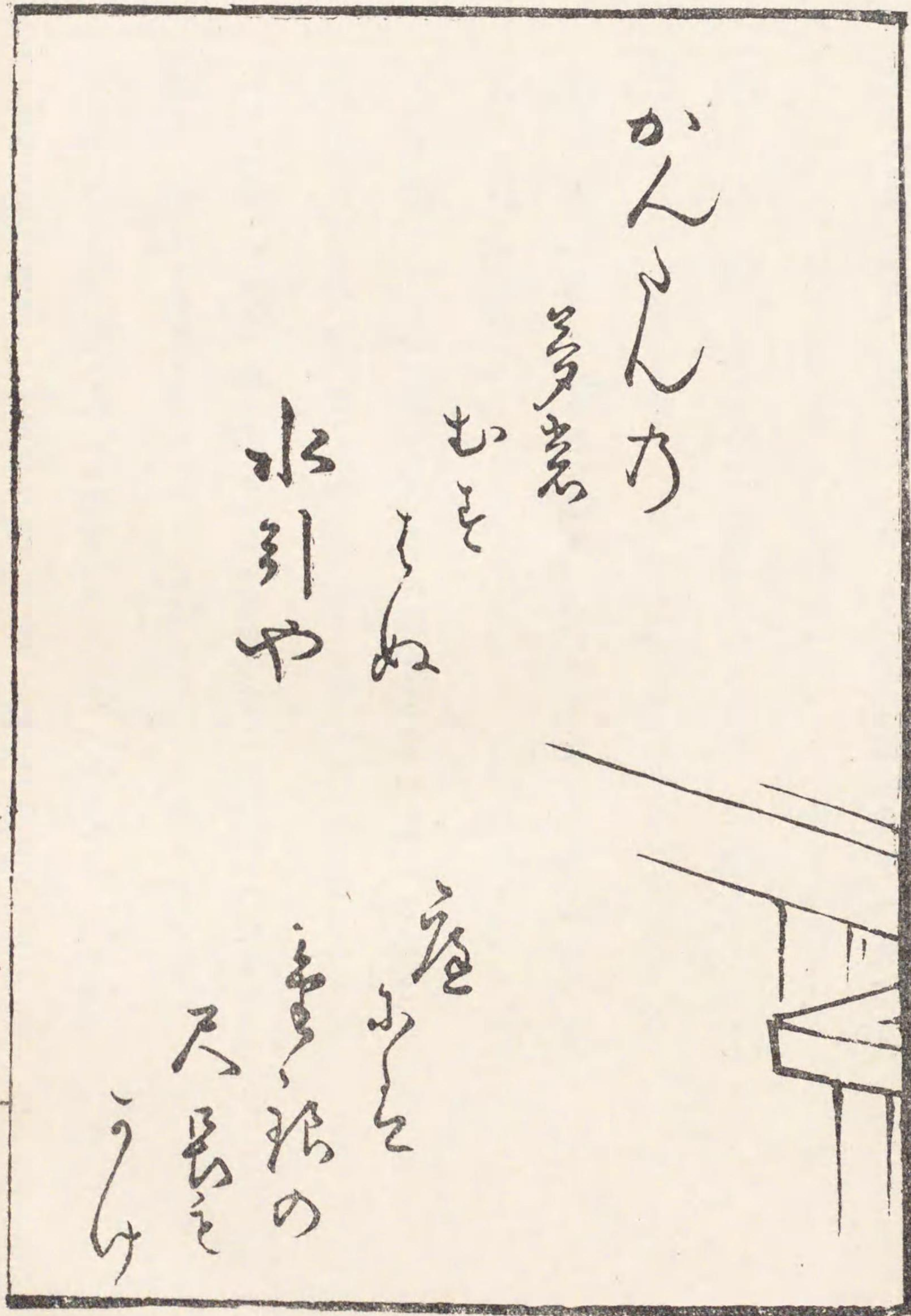
へつ甲のくもらぬくしのさす影はさなから月のこまものやみせ

古 本 店

絲きれていとゝ古本まけさしやれひやうしぬけての買もかかれす

昆 布 店

幸ひと心祝ひに買ひもせん見のかしならぬ夜の昆布店



植木屋

あけましよとはなあひのよき植木やのもとねか安ふついであるかも

硫黄屋

おもとめといはうの島の名にめてゝ直をやすよりになりつねもかな

焼玉子店

いさ買ん夜ことにての玉子やきさなから色の山ふきのきみ

古手店

れきくの袖もすへのさかさまにきれくとなるときものや店

乾物店

見さらしていぬもよしなやよしの葛外にもあらめまけておかしやれ

菓子賣

賑へる貴賤群集の夜みせとてよう宇治山の菓子ハ賣なり

袋物店

もと直てもまけて夜市ハ夕くれを口あけといふふくろのみせ

竹の子店

七けんかいや何けんも竹の子の竹のはやしとなる夜の市

呑酒賣

味酒の三輪ならなくに上かんやゑるしの杉の匂ふ提おけ

枚屋

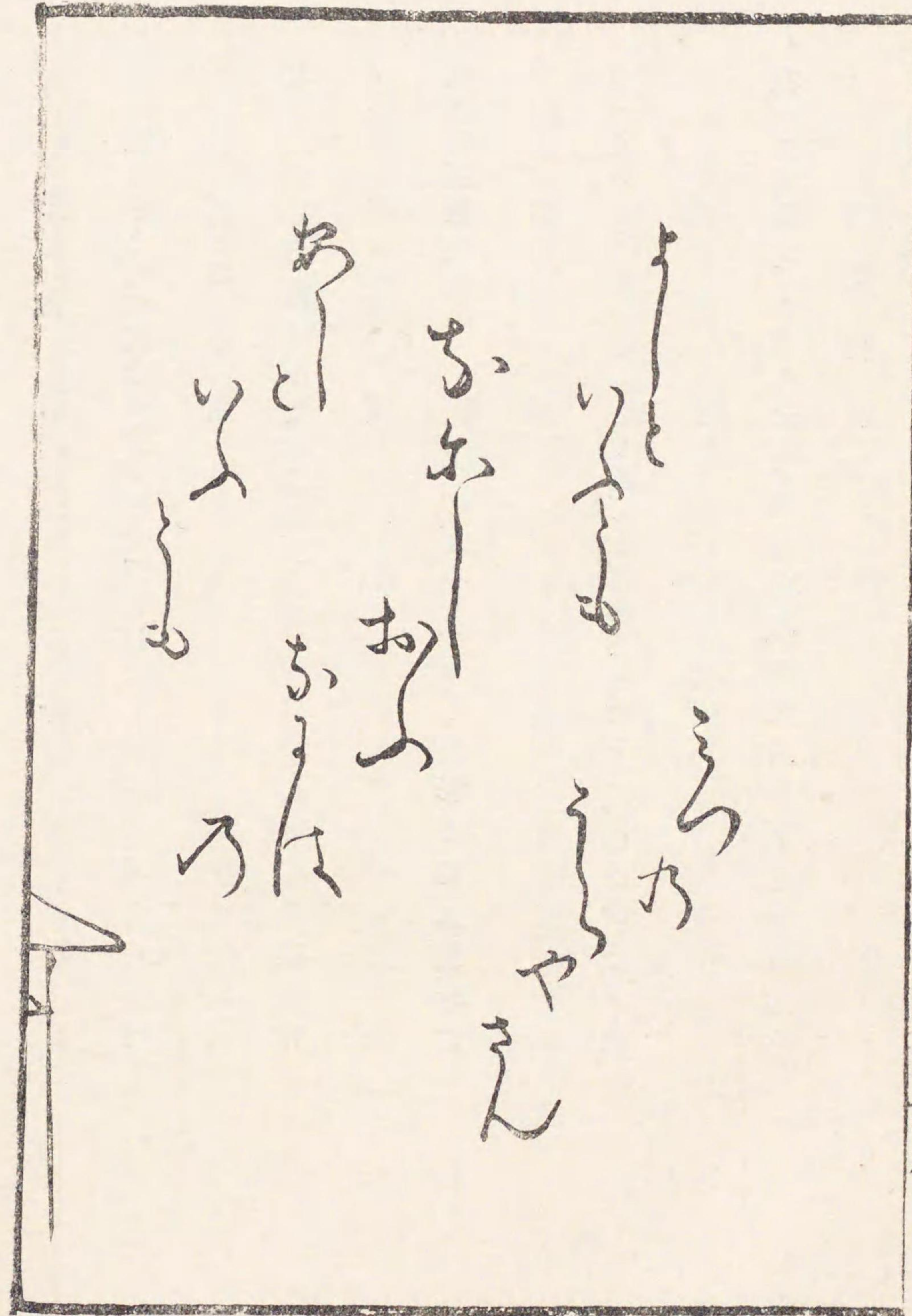
つい底のぬけもやせんとくみてゑれあまり安うにかいけひしやくは

煙筒店

夜の出て目をも光らすきせる店鼠やならハ名も通りもの

油揚物店

されいよて揚ものならハ此みせとそやさハそれも油とやいはん



樂 燒 店

茶めかして樂燒茶わん出しなからこれの夜こみの市の店つき

障子のすかしや

筒井つゝ井筒まあらて丸ひきくすかしけらしなほりぬきよして

懷 要 燭 賣

折々にちらと火かけのきつならてくわい要そくの重寶そかし

金 物 店

りん燈のさらなり引手釘かくしぬけめもなしに店をかさりや

丁子屋齒みかき

匂ふの家の名におふ丁子まてくわへられたる齒みかきとする

燒 栗 屋

菓子盆へまかり出ねのやきくりのかはひやみをのはちるなるらん

馬の毛ほこり拂

馬の毛のほこりはらひとなりぬれのちりほと直にも追かけのなし

上 元 土 器

上元の油かはらけあふらさへへらす口てのなにかへらしな

あまさけ賣

盃にあらて茶わんですゝめます爰までこされあまさけく

花 生 竹

投入の花生竹のよそよりも水きわのたつ玄ろものやさて

餅 店

酒の名を引うけぬれとさゝ餅や徳利餅の下戸にかたふく

張 交 晝

押ませに晝をかきつはた花あやめよたりくの布袋とのまて

古金店

賣ものに花の氣もなくみよしの、鮎の名にあふさひた古かね

菓物店

きんかんや桃梨ふとうかきみかん春夏冬もあきめなきみせ

取肴店

買人を客あしらいのとりさかなつまみ錢ていこゝろやすさよ

簾屋

代呂物を巻ならへたるすたれやの店の軒端の下よかゝれる

美酥粕賣

昔たれかゝる美りんの粕をうりてこほれ梅とは名付そめけん

すつほん汁や

すつほんよおもひゑるらん汁となりて今吸るゝの吸ついた科

軽口噺

おかしくも咄いふきのさしもくささしもの人もはらにすへかね

鮮店

いかにせんみやけにすしのよけれともなれし風味のなとやゑれねの

松茸店

誰か目にもかゝりけらしな足引の山のかい人のたかる松たけ

鳥貝のさしみ

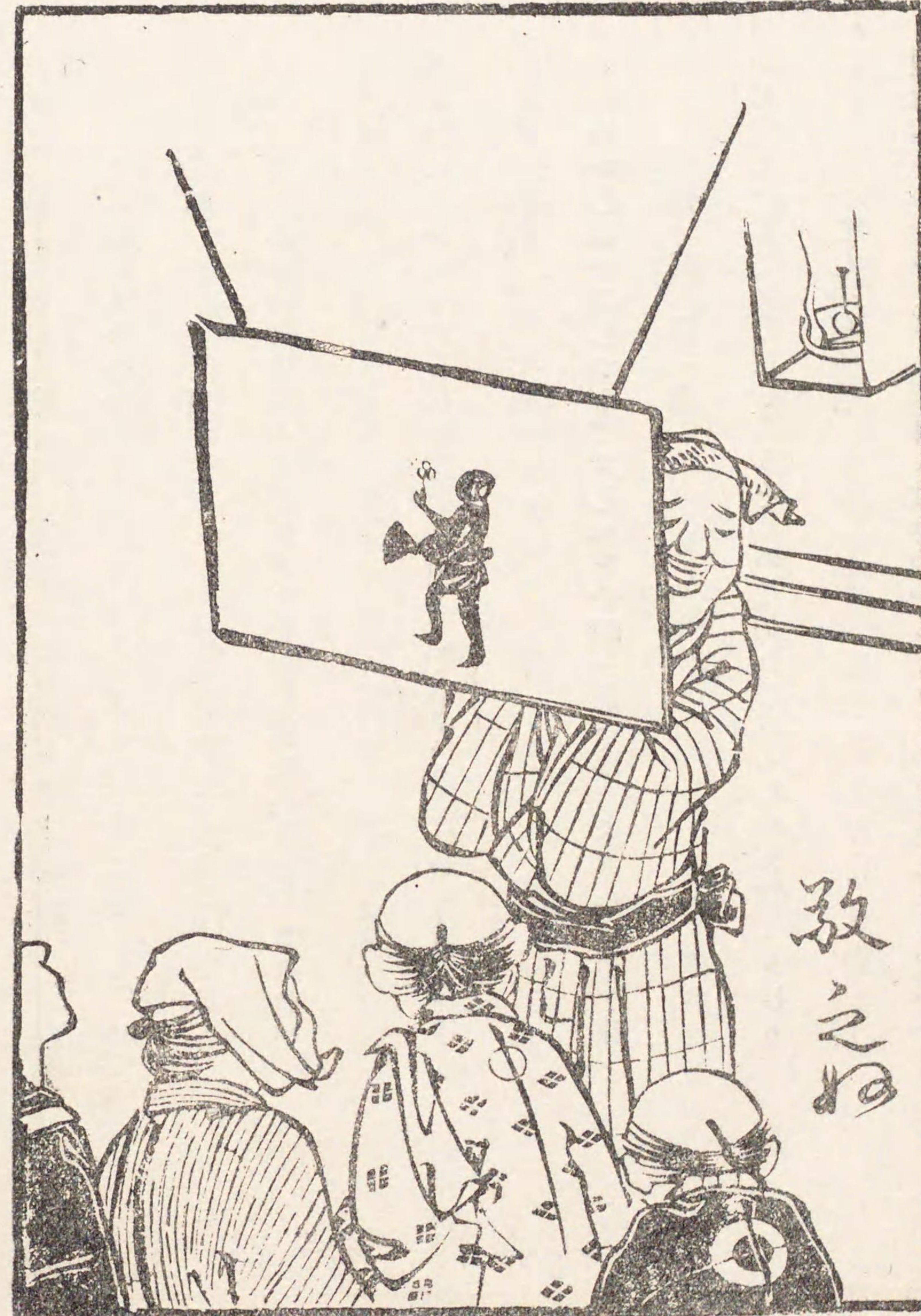
そのむかし誰かさしつよてさしみそや咽を飛てふとりかいの味

勘定蠟燭

かん定といふてかけたるらうそくのなかれもあへぬやき物なりけり

おこしや菓子店

短夜のゆめをさまさん寝耳まはみつからよりもおこしやの菓子



うなきや

夜市でも長やきうなき安からてあなつられさるものよそ有ける

よ玄ん昆布巻

又めぐりあふてうふしをまつまへのちきりいつきぬよしんこふ巻

ゆて蛸賣

有馬山いなものなれと何はいもゆててふ蛸を安うりやする

奈良茶飯

いよしへの八重櫻よりけふこのえもいはれさるこちやなら茶飯

鮒のもり賣

よきのひて人も市なす店さきのこみによのすな鮒のもりうり

みたらし團子

戀せしとみたらし團子味噌にせてまやうゆうつけとなりにけるかも



致之

先師如棗亭のよみ置し八十餘首の外にもれし數々のたらざるを僕拙き身にしあれ
と師のこころさしのもたしかたくいさゝかその不足を補ふ

門人 棗由亭負米詠

鯉節店

すなとりのわさのえらねと今もなをあみにかゝりてうるかつをふし

面店

とれなりとよつてめしませ面のかすわるいゑるものかつけのいたさぬ

蔭店

高ひ安いみな代呂ものによるねこさてしまともいひゑむしろといひ

鬚くゝり

千はや振かみてはきかすちりめんのからくれなるのわけくゝりとは

索麵店

秋きぬと目よのさやかにみわさうめんおとろくはかりうれる盆前

手まり店

鶺鴒川よはあらて夜市の手まりみせ絲のかゝりの火まうつりよき

黒鬢付店

白髮染の黒びんつけのさねもりか工夫をねつたものでこそあれ

銀細工店

西行の猫もありとやしろかねの銀の目かけてうる金もの屋

花竿店

さくやこの花かんさしの冬まこみ今をはるへとうるや新もの

岡山煎餅

長船とおなし名代ややき場にてすくにうつたる岡山せんへい

硝子店

ともし火に一しほ夜のひかりそへたまとあざむく硝子や見せ

花笠店

定家にみせはやみせにかさりぬる花やもみちのおとり子のかさ

燈心屋

世わたりの細ふみゆれと情出してとほしからさる燈心やみせ

箸揚枝屋

御馴染のはしとなりぬる商内や御やうしあらいたのみ上ます

紅粉店

なさけをい商ふさとのちかけれいこよもおいろうる店つき

白粉店

夕貌のはなをよそほおしろいやまろくみゆるたそかれの市

墨筆店

月をもてかそふよはひや墨みせに日記のふてのいのち毛もあり

針店

絲による柳さくらのみすやとて都そはりの本家なりけり

砂糖店

時しらぬふしの高根も相場もの氷さとふやゆきしろのみせ

齒漆店

調法のこのはうるしのはけるやうなうそも申さすまけもいたさぬ

ふしの粉店

よけゆくをつけめとなしてふしのこを一割ひひて賣おろしなみ

はいの獨樂

はいからのこまかに心つけてうるこれのよい利にまはりやすらん

たうせや

小うせきりきと

きぬ糸乃

店商内に

ちよと

か勢ハ

十甫



あきと

宮 屋

現きんにはらい給へといふたすきかけうりのせぬ神棚のみせ

狂歌夜光珠 終

文化十二年乙亥十月吉日

御集冊并海客の里その不お変退く用も帝上

酒百首 退刻 如棗亭栗洞詠 全一冊

廓百首 退刻 東由亭員米詠 并社中詠 全一冊

狂歌書林 浪花中橋筋 瓦町南江入 千里亭扇屋利助

浪石之八卦

解題

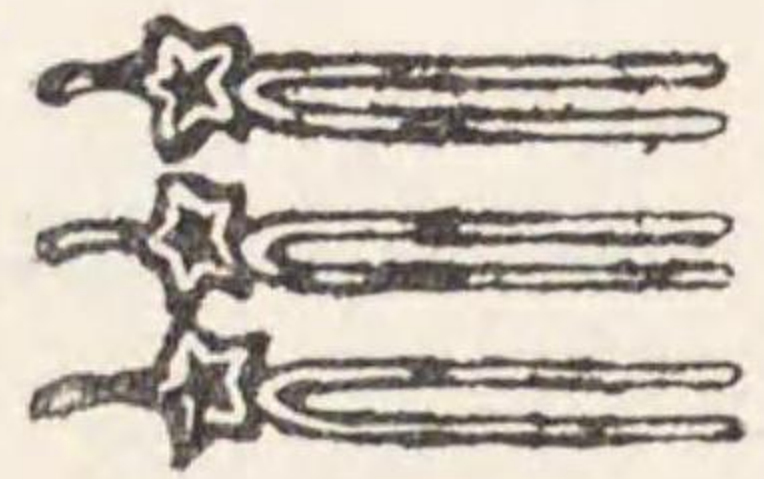
一 『浪花色八卦』、原本は三十一丁。天地六寸二分。左右四寸二分。作者の署名もなく、板元の名もなく、刊行の時代も書いてありませんが、安永二年(我が二四三三西曆一七七三)に書林『合中堂』から發行された『浪花今八卦』の序文に依りますと、この『色八卦』の著者は、『外山翁』といひ、安永二年より十八年以前の刊行であると書かれてゐます。安永二年から十八年繰り上りますと、寶曆六丙子歲(我が二四一六西曆一七五六)で、丁度、竹田出雲が歿した年に當ります。そして『この年六月、米價騰貴するを以て米商の密藏を嚴禁す』と年代記に出て居ります。この『浪花色八卦』は、こんな時代に生れたのであります。

一 この書は、その當時に於ける浪花に散在せる遊里の光景を寫したもので、著者『外山翁』の傳記については、寡聞淺學の校訂者は一辭をも記すことが出来ません。たゞ大坂嶋之内附近に住んでゐた人と思ふだけです。この『色八卦』があつてこそ、後に『浪花今八卦』と『今いま八卦』とが生れて、その當時々々の遊里の狀が躍如として今も尙、われ／＼の眼前に展開されることゝなつたのであります。

	<p>テウリヤウ 上治町 葛菱卦 野堂 了のし 三場光</p>
	<p>ホウケフ 宝結卦 堀 なやむひ</p>
	<p>シイセン 捲彩比 繪扇卦 ひあふさ 彩扇</p>
	<p>トウタイ 桐葉卦 新町 きりのとう</p>

奥又色道又条在秘傳をあらはす

浪花色八卦



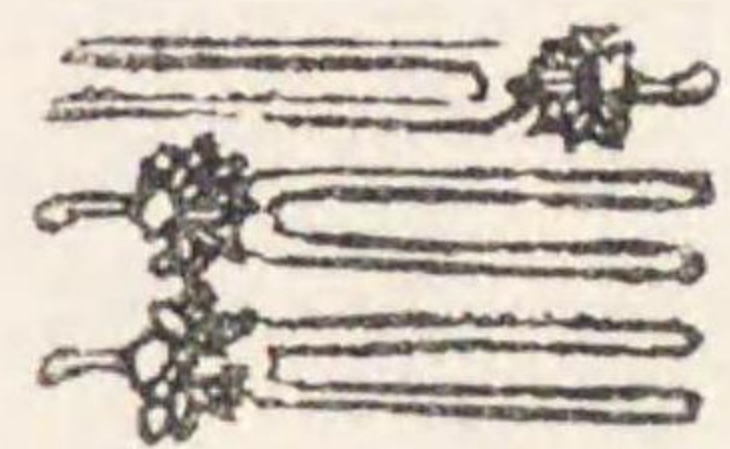
キチカウノス
桔梗卦
まきさやう

桔梗ハ嶋の内并坂町の卦也○活氣の人多く來ル○萬花麗を好ム○色更時々かわりて久しからず○此所八卦の中に
てさかんなる事の第一にして女郎も其うぶなるハ十五六より出し 浪人の娘 貧醫の妹 姫のぞけまほ 梵妻
の還俗 舞子の果 京の仕替 西の落北のなぐれ吉トなり凶トなり萬物容の卦なれば舊きを去ツて新しきを要と
し月に日にもかわりうつりて事をてんずるを妙としはなやかに面白きハ此所にまされるハなし女郎も其勢ひに
のつて意氣強くいやみをぬけ色道の禪氣や野郎を買ふ中居あれば役者に賣ル藝子ありて粹がる事を専とし衣裳手
まわりの物ずきも人のせぬ所をあんじゑんま大王も紋にして付たがり髪も折にはぐるく卷にて黒縹子のうしの
くそ若きハあめの鳥のやうなるもありてにくてらしひ仕立色事を隠さずしてはりこんだ所をすれば却て評判吉に

してはやる事多くせりふもまだるい事なくサアといふと客にもはりこむ事きびしく又うつけ客のいやみあるハ喰イちらして賣り／＼ひどいめにあわせ年より客のくせにアタなめたと思ふがさいご□□でもどうよくにまゝ子あしらひ贅も相應にいひ。はやり言葉絶すしてそれがやめは是かはやり早う覺へるを手柄とし知らぬを文盲がり古ルけれど折にへせんほうもあがき客も三日往かぬとはやりものニおくれ遊びがとほつくなり中にもめてなる女郎ハ猶まけ惜み強く一度も逢へぬ客でも名の高きものにハ夕アも逢ふた噂なんなと仕出して哥に諷れたがりまさいらしひ事いふて見たがりわたしや此中西照庵で哥を仕たら砂原の五さいおやうさんかほめてどあつた下着ハソレ高らいばしでもなひ所のまつとうさんからの唐畫かいて囉ふ筈じやと取てもつかぬ片言さゝせの多葉粉入のつぶれぬやうにまんを入レながら持て居るハなさけなしそれをよい事と心得て。にやこい客が其通ニしてもたる、ハなを論に及はず菅笠は初天神からきかけ何の願も祈もなきに物語を第一としそれもあいかた同前ニ心得てモウこんひら様でもない此比ハ長町裏のびしや門様へはり込み色事も飛つくやうニするかと思へばする事はやくきのふのやさ男へけふの坊主役者ニかわり其醫者がおもしろがるうかアノ絲鬢に出かきよかと少も着する所なくして氣味のよき所也客もさま／＼の風俗ある中に二十そこの若い男くすんだ着物ニ色ハ鼠當世茶の細帯どんな小紋の短羽織びんには油けをもたさず女郎にほどく／＼しひ事いふて俗のはなれ自まんいつかどの粹じやと思ふて居ル客とまきびんをきん出してひからせ裏うち帯して長哥のちやくり諷ひする客とかたちハかわれど根性のい

やみハ少もたがわす此罪業の秤でかけて見たら色男の方が五六匁かるい事也何となひかたちハせられぬ物と見へたり女郎の手くだもありふれたるハいふに及はず男ぶりのわるいくせに九も十もくわぬ客にはほれたといふてハがてんせねバおまへのやうな悪人ハないとたつた一言の悪といふ字ニ無量の氣味合をもたせて嬉しからす事也色事の中宿も盆んと唱へて戀無常をこちや／＼に人くさひあたりの家居爰にても手ばりの奢強く折ふしハうまい物會も興行仕三ツ骨の味ひも覺へくぜつも一際新しくせりふをつけてはなやか也客が茶屋の門口這入ると中居のつかみ付様にいふてうしハ又外になき勢ひ也法師いつれもよろし外里の幫間ハむちやうに拍子つき檀尻藝を見るごとく鳥さしも仕かねぬいきおひこれハ幫間の下品也此所ハ幫間の水上にして仕うちばたつかずせりふに穴なくそれ／＼の客の氣にあてがひ森田幸介をはじめ平助喜六宗助與八松治音太夫伊勢太夫其外數もしらす利八隠居して日養坊となりたるも興也繁花第一の地なれハ勢ひ強く二人リ三人請出してもそれには曾ておとろかすぢぢむさき身請などは却て客の名をくだし生涯の耻となる也よく／＼慎べしちばらくもけだいなく通ひて黄白をまき遊びの仕うちよきをもつて名を上る所也茶屋もめい／＼伊達を専とし中にも品のよきハ貝半大七さかなつ。てうしのはづみたるハ川作大才又近江屋井筒屋。おとなしきハ大治豊三足代伊長吉。橘嘉天吉ていねい。落つきたるハ足代大若吉。富市綿庄ハ茶屋栖を作り。嶋九竹傳賑きやか也其外岩長岩善長喜河庄あぐるにいとまなし又坂町の盧路の内によしやといふ呼屋ありて此地の黒がり所にてさま／＼の獸集る也御はらひのうちハとり分々芝居側住九

り角ト丸迄の間俄の本ノ舞臺にして數萬のてうちんをつらねて夜のおくるをふらす此灯の影に出張してのらの面を照らすべし此卦六月ハ大切の月なれハ晝夜わかたす心身を盡して遊ぶへし



龍膽ノ卦
リウタンノ卦
さ、りん、ぞ、

龍膽ハ蜺川曾根崎新地の卦也○朝迎選し

○比言中○ 翫間のけんかまひすし此卦も萬物發生の所にして其女郎の風俗ハ新町東京の祇園町を合法してそれより一段つたなき位也強きともなくやすらかなるおもむきゆへつたなからす牙婆トいへるすまじき女郎も此地へ來ルとにつちやりと見へて手を取らす事多しかりかしの定りなけれど女郎のきまりゆるやかなればひとへ帶のなりでちよつと來て□□□□をうたせこまかなる客をよろこばしむ始より中ウといひ丸花となへ新造ばやりのする所にて出かわりめきたるも多く出す也志かもよき判官あまた入り込み近年よほど飛んだ仕うちも見ゆれど一體ほつとりと遊ばせる所なり其ゆへハ在所から十一の年さる間屋へ丁稚ニ來て酔にもたこにも遣われ店番する

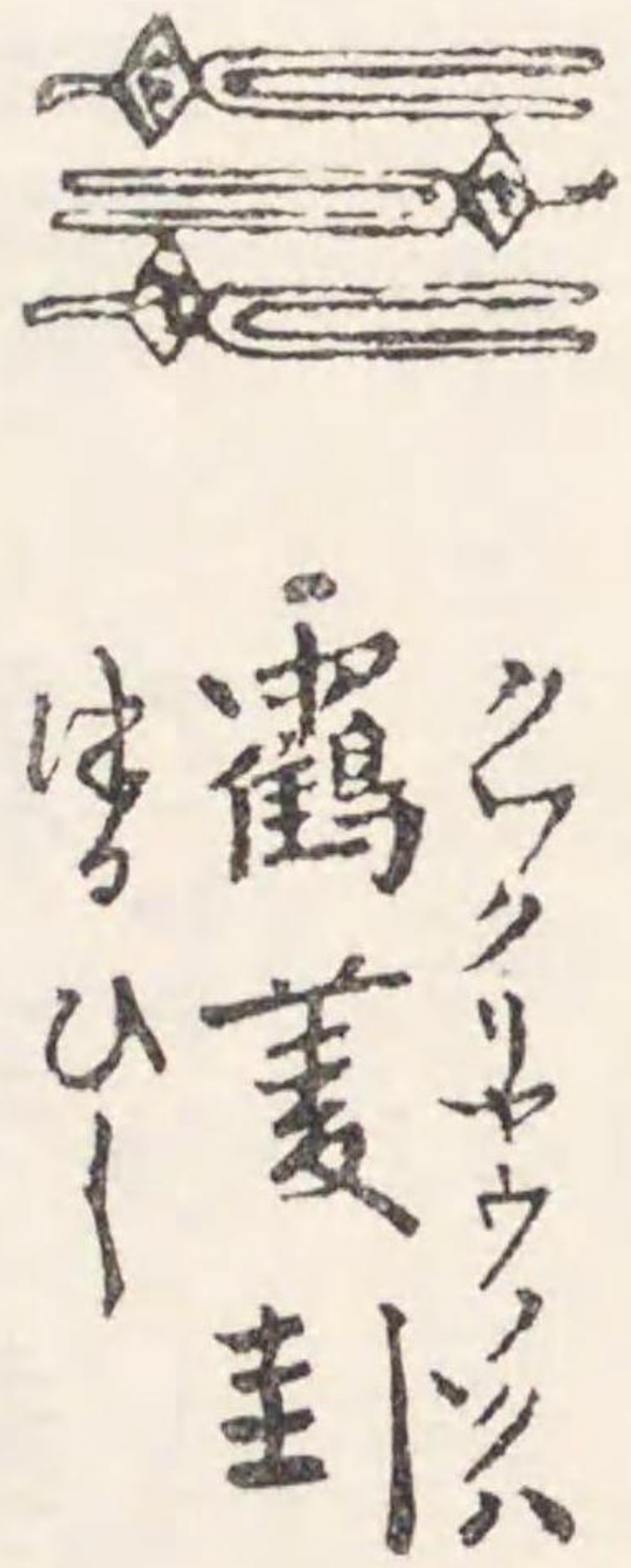
間も錢さしをなひ難行苦行して親方の眼にとまり元服しても茶屋といふ物の牢屋の如く恐れ折に□□□□かつまる
と現銀買にさらへ。飯喰ふた箸ハ三度ツ、禮拜する手代今ハ番頭となつて銀も自由なれどにきりつめ。ある日梅
田へ葬禮に往た時わるい連レに引すられちよつと此所へふんごみ味を覺へよろつうちばなる所ゆへ人に知られぬ
を調法がり二度行五度通ひ見るほどの事嬉しく四十有餘ニなつて漸極樂の道に入り宿這入
銀の成佛うたかひなし。こそくと大銀つかふ親父客の多き所也舞子座敷藝のたぐひは新町の道具なりしを今ハ
此所ほど繁昌するはなし金らんを着もの着たこびつちよに地をする藝者共が大勢付いて最初が蘆かり。玉豐の志
つと。奴の道行には此女の子にふんとしか、せ尻をクイトからけるがはねになつてよだれを流す客もあり所の風
俗ハかわつたものでよほどきようといとは思へど此所て遊べはごばん人形もあばらくハ見て居らる、物也藝子も
やわくと。つとめたいこ持ハけんを第一の藝としてはけむゆへおしならして此所強しはやりうたはやり言の遅
きも女郎の知らずに居るハかへつて心床し折には廿日卅日南の哥舞妓此所の芝居へ來ると女郎もはじめはこたへ
ていれど役者珍らしくかへ名を覺へて樂屋付合ついにハほころびてそれにもこれにも持て参り地女のぞけたやう
になるもよほど笑止なもの色事好きの役者ハそれを給銀のかわりにして行けなと法界りんきする人のいわれしも
尤也小茶屋のうちには居續すると。きもつぶすもあり亭主が出て兎角細長う御出下されませと染んだあいさつも
おかし蜺川北側呼屋一丁目より初て三丁目四丁目迄すき間もなく座敷の工合庭のとり方皆同し行かた也南へわた

つてハ大茶屋鯉新鯉作松坂屋中にも菱屋善五郎といふうがちがしら客とともに遊んでびらをいわすてつ水といふ誹名の通りたる茶屋ハ浪花に是ばかり也此地の妙ハ始人に二人りか三人外にもなきほどの飛切を出す所也客常ニ油断なく通ひて福ヲうる卦也

此變卦に中町といへるハ格別事かわりたりいかなるゆゑんにやうちかけしての店つき一體現銀立テの所にて遊ぶへき客を見立て引込み木戸といふ下女さだめのこときわめて奥座敷へ客を通す欄干つきの椽に庭は泉水に蘇鐵きりしまあしらひやせかれた石臺の蘭小便箱の傍にすへ手ぬぐひかけおごそか也奈良の木辻のもやう思ひ出らる盃か出ると店にありたけの女郎どやくと出て来て百萬べんくるやうに居ならへバどれこれとさし圖して其夜の君をさたむる也取肴やうのもの硯蓋きつしくに取合せうす平ラたい大鉢に花のある物をかいしきして作り身を哥かるた程に切り立蛇の鱗のやうに並へてふしみ焼の摺鉢にした小皿へもりわけてさし出せば扱もからしかきいたと客があたまかへれば酌する女童が盃とり上げて其口へ一ツ上れとまみつたあいさつ床の段になりても置屋の遊びなればせりふくぜつもなく只□□終ると去ぬるとがいつとき寐る事一へんの客ハ四ツより泊りを取て伯母の所に寐るやうに酒ものますに屏風に入り(此ノ所八字抹消)おかし此所も必残すべからず

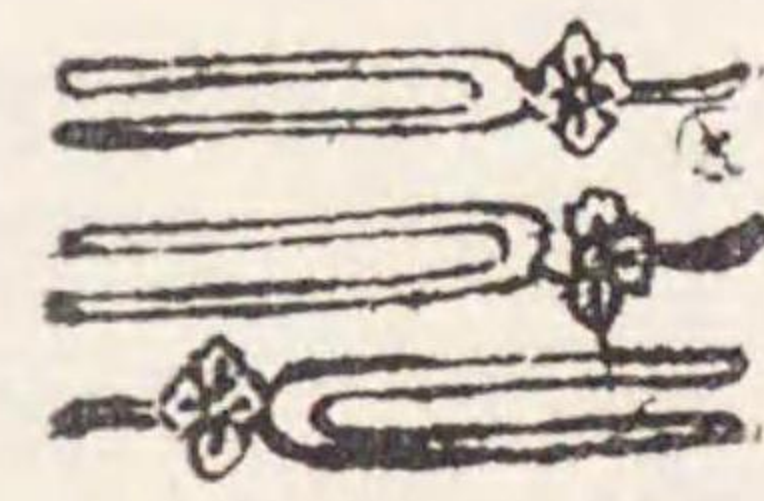
こつほり町ハ蜷川の東につゞいてはるか品くだりたる所也店つきをなして局めきたるも見へたり多くちかき在郷の人の樂しみ所七八年前にはやりし桐の木印籠南艸入レそれをばやらぬ先きから持っているわろ達が多く此所を

はいくわいし綿初穂のわたくし新麥のぬけものが錢と化して皆此淵へ捨たる也泥龜やの戻り足爰に夜を明かすもありそれ相應の意氣地も有るへし



靈菱ハ高津新地六万臺勝曼此卦に屬す 高津新地ハ相牛橋二三丁の間を上品とすなんは新地の女郎に堀江の強あるものなりまへも爰より嶋の内へ出て鳴たる藝子多し釣鐘筋耳をふさぎ溝の側に鼻を覆ふ近比は東南の端に鹽町野堂町からひきたる呼屋五六けんあり春ハ野郎つれた几巾のほしも來て水茶屋の床几も賑わしけれど此上ハ工夫してなんぞ持直す事あらば所々の明き家もふさがり古道具屋もないやうにのこらすあんどを釣て繁昌すへし 尼寺前といふは月江寺の西の門から十文字に軒をならべあるしの女房か門口につつはつて鼻へ聲を入レ顔でまねいて客をまつ酒肴も望めは出してもてなす女郎ハ方々の落手合。もめんの黒布子にぬいもんしてあじをやる晝の四ツ過比よごれ布子に一重帯でおもい〜に居風呂屋へ行きあがり場てわいら同土色事の噂も其いきぢはひとつ

なり往來の在所者此所にうちがひをたゝく也
六万だいまよまん此所煮賣といふものを立にして内に呼ひ物のあるも見へ又外からもつれてくる尼寺のてうしな
れと折に少まさりたる有り皆此あたりへまろとめかさす心いつは女郎めかし艸双紙屋か作ツてわたして門々へ
諷ふて來る國太夫ぶしせめてかたけの精進をといふ反吐の出る文句を覺へさても能ウうける聲じやと思へは爰
ハ祭文かたりの住所なれハ其ひびきなるへしなじみ紋目の沙汰もあつて相應の花をやる也



ス
ク
ウ
ノ
ス
花菱卦
とよひ

花菱の卦ハ 安治川 靈符 八軒茶屋 編笠茶屋 眞田山 北野梅畑

右皆此卦に屬ス安治川留島新地堀江のかたありて女郎ハ汐風にもまれてふやれを専とし緋鹿子のおばんの襟おし
くつろけ引すり下駄なやしかけて呼屋入り客もさま／＼のていある中にこゝ大臣と見へて空色つむぎに江戸ぶと
りの帶羽織ハ着ぬも着たるも折まじりて碗をおろし初よりゑびすの繪のある大盃で呑みかけヤアラめでたの若松

様とてつべいから聲を出してうたひ女郎よんだ客へてんま舟のごとく腰元ニひきつけゆふへ松屋の門てあふたの
にヨウ見ぬ顔でまぎつたナアとひざりかゝればソナ太郎丸いふておくれなトレ其酒瀨ごしふやうかと助ケてや
る又酌に出た小女童とらへてぬしめはたしかに□□□□じやおれがゑぶ付てをこと手を握ハ此はつさいもまけて居
すヲットあたつてくれなんすな□□□□といふハそんなじやといふ事か陸では聞なれぬ隠し詞て遊ぶ所へ
亭主がそこから戻つて是ハ／＼ありかたひ重荷かとれた富士見客に浪くよりなんぞ珍らしひ吸ものをはしらかし
て参りましよと臺所へ立て一座のかぢをとればこれから遊びに足かいつて屏風へ入津の段をたのしみ曙の追風に
目をさまして戻り道迄をねまきながら送り状文のかね言も偽ならぬ住よしの神かけて只無事着をいのるのみ也九
條嶋ハ又はるかおとりたれば其品をふるすに及はず芝居へせねど櫓もあつて遠國入込み繁昌の地なり船おろしに
よばれた戻りか鯊釣のついでによつて此卦のおもむきを見給ふべし

北野 梅畑 此あたりハ表へあらわれずしてよほどふるき所也素人といふは楯にしてよび所も外商賣をかねひる
の焼餅店 夜るハ其生餅屋となり又畑近き井地のほとりひしかきの格子の家寺子屋かと思へは内には菅笠風呂敷
包なと取ちらしかうかい髷のほつとり風俗二三人数入あるいは出かわりと見せて大かたまつ黒なるまろもの也す
ぐれたるは曾根崎一丁目の素人出の位也能ク目利して遊ぶべし

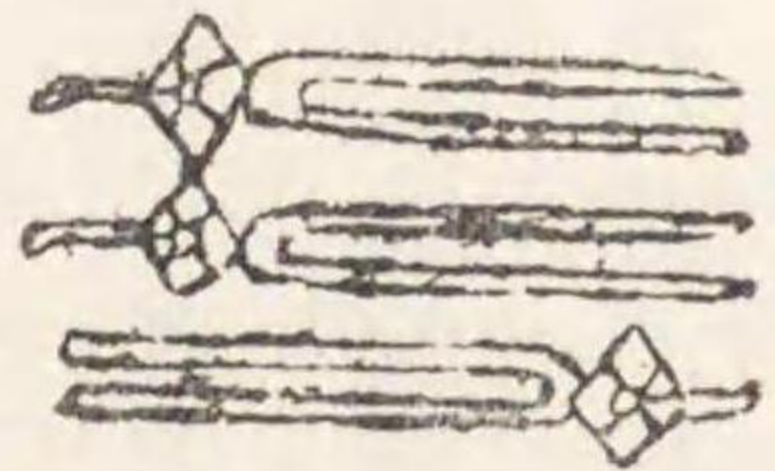
眞田山 此所の婦人靈符の格にしてちかごろさびて又かわりたり狐の穴深くほのぐらきのうれんから一重帯の尾

を見せかしらへ四ぶ一のかんざしニ水牛の角く櫛安おしろいの厚化粧藻をかくやうに身仕廻して顔も鼠色ニ化けちかき在郷の若ものにのりうつるまたぐみたの長兵衛八坂の三六など異名て呼ぶ客多く入り込隠し詞も一段おちてさんせうをつみ色なじみのわけありてたてひき強く春へ相應に賑わひわなにかゝる人多し
 あみ笠茶屋 こゝも素人を表にして大かたくろし雀すしの名所なれば百迄の巾着錢にて樂ませ折にまこと素人あるへ皆はぐれた伊勢まいりのやうな風俗毎日風呂へ入りやるかときれい好きする客がとふて見るほどの事也つとめなれたるへ相應にゑたいをかざる折にはみめよきまろ人出る事あれとも甚まれなり其時を能考へてもらすべからず

靈符 此所へこばん屋町より這入ル門あつてそれより細き辻子にのうれんをつらね婦人へ曾て素人めかさずいぶんくろがり菊野さくらなど大名をよびなじみの義理あいかたのせりふもかわることなしこしをのすとあたまうつ二階を座敷にも寐間にもつかひ床の段になるとあるじのかゝがさくらさんソコ(此ノ所六字抹消)といひてはしご下りれば合點して江戸繪と山水の天狗とはつてある二枚屏風をひきまわしひぜん湯のやうな嗅のするふとんに(此ノ所七字抹消)籠も枕元に近し寐ながら多葉粉のんで(此ノ所八字抹消)おまへ御なじみがあるなとぞつとするほどおかし血氣の若ものへもつたいたなくも朝參のついで空腹で遊ぶもあり爰も好色の修行所也

八軒茶屋 此所へ靈符と品かわりておじやれの體なり店にへ蛸の天蓋鳥貝の高もりを置いて前たれがけにて人を

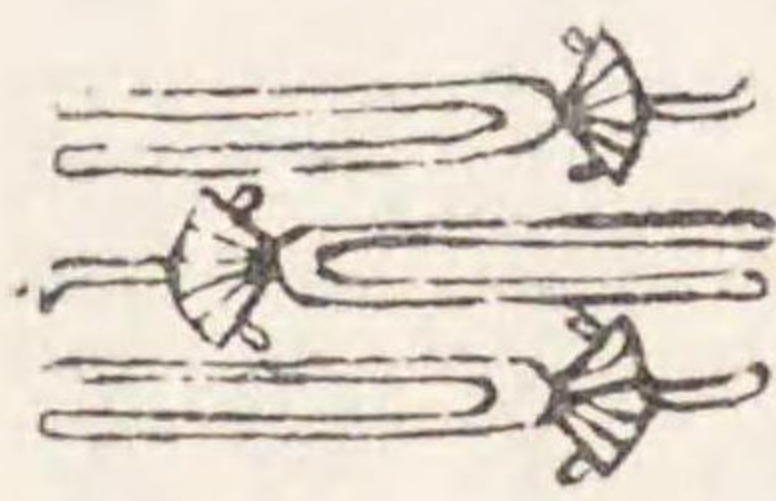
うなづき客へ多く武家の奴ツこらさを初として近比多く入込み繁昌す遊はんと思へはずつと這入て座につき是をと思ふやつをうなづいてきせるか茶か乞へばはやわれじやと合點して前垂はづし(此ノ所六字抹消)ふ也かゝる所にへ看板の首といふものありてよい顔を門口のきつはしへ出してまねかすればそれを目當にして這入りこめろ呼んでさし圖すればアレハ内の娘御じやとれぞ外になさんせといへばせひなくどうみやくをつかむ事あり能々見さだめて遊ぶへし



テウヤウヤ
 葛菱卦
 了ひい

葛菱ハ 上鹽町 野堂町 馬場先新地皆此卦に屬也婦人へ鹽町五六丁目馬場先すじ野堂町此あたりを上品として御寺のまくじり請出された始人倒た小茶屋の娘 喰さがされの中居新町ほぐれのとしま眉落して内儀出又博奕打のやけみた女房とあいたいづくで廿日卅日つとめさせ呼びにくると子をとなりへ預けて俄に唇に紅粉をぬり張る乳をもみこんで(此ノ所六字抹消)り一昨日から坂田市太郎が後家が出ると珍物さまくの落合イ所也衣裳へつむぎかゞ郡内じま素人出は絲しまに黒ぬめゑりはとひろからぬむらさきちりめんの帯おのく價へ段々ありて花のせ

ん香ハ呼屋の臺所に立て客へきまりをみせ呼屋の上品といふハ路次の内にたいがいな隠居様といふかまへ又下屋敷の住捨てまかもよき庭に木々あけく石燈籠ハ見へず鴨居にハ額の取れた跡の折釘のみ残りよろずの調度の家居にとりあわぬもおかし又品くだりてハ表ハ肴屋裏さしきをとりつくろひて客をするもあり大かた路次の内の住居多し藝子もひんちやんと仕まわり琴引きの替女も來今川といふ法師此近邊の住居なれば大かた是を學文所にし
て今ハ浪花獅子いさゝめも間に合ハする也ひところハ野堂町に地ぞうめんといひ一名長刀ともいひて存もよらぬ判官どもいりこみはやらせたりあつちハねからおまんせぬ事て此所に過たるよいものハ曉也裏道の野傳ひ秋ハ朝露にむしの聲残りおちこちの鐘によべの酒氣をはらひなかつゝありくうち遠き山に日の代ほのめく此景し
き又捨られす馬場先新地の婦人ハ同じ格に見へて又おとり鹽町も一丁目ハ位はるかおちたりびんろうし染丁子茶
ぎんはな色皆もめんぢまひちかしひぢりめんの内衣のはつかけハよつほど珍らしき物也同封たりといへども變爻
にわかちあり能々考へて遊ふへし

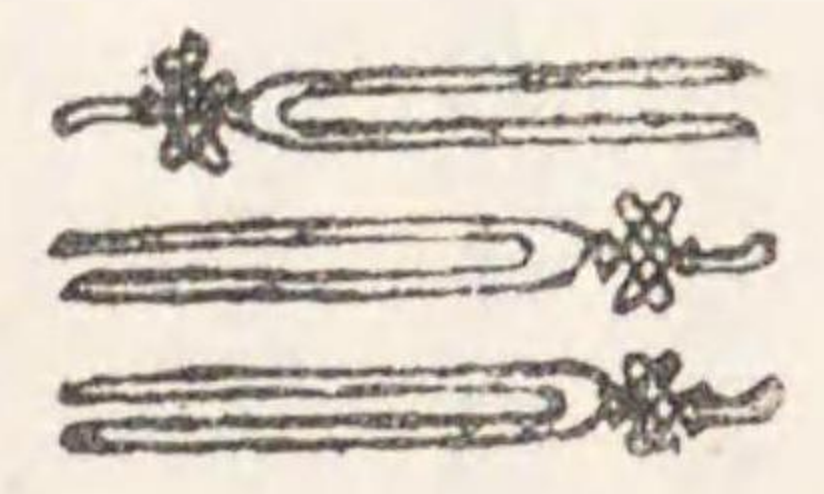


クワイセンノクワ
捨扇卦
ひわふぎ

繪扇ハなんば新地の卦也女郎ハ坂町のおち堀江の仕替尼出ぬ新造の出る事さし紙口ぶれ日々數をしらす又此所に我内あつてかりみせから出るすいがらしまたい顔してつとめる狼ありよう行くといふ女郎ハ存之外りきみはやるとはやらざるとハきつぱりと衣裳にあらわれ入レこみの新造どやつき此間逢ふたまかない出を呼にやればけふ
ハもふ去んだといふ出るも入るもいそがしくちか比別て繁昌の地也新造といふも大かたくわせものにて誠の素人
ハかへつてあろとめかす出合の女郎にもまけすいらしし事いひたがり味やろふとする所是本白の正銘也爰も藝
子ハ女郎より勢ひ勝て内證の色事もまたへはどふなりと是になづんで入來る客多し是まで嶋の内て鳴らす藝子此
所より出たる事あまた也うつほさるかたし貝かつら女三ツ四ツ覺へるとはや十一二から座しきへやれば可愛がら
れて大ほやしにまけずはやり扱もよい顔立じやマア二三年したらきつとしたものじやと思ふて居らうちちやんと
向ひ側へ出た噂此所の福新といふ置屋必よき藝子を仕立る店也中にも年のたけたる藝子ハ強仕立にして着物も壁
下地のあらしま裾みしかに着なし帯ハかるた結び髪ハひつこき地聲ハ少うらがれて何やらわめき座敷へ通り
客を見てコリヤ珍らしひ顔じやなあとなめかけなんはの鉢のみ今にわすれぬわいなごふしや河堀へ御出たかどが
いなる事をいふを專にして三味せんつぎ國太夫の道行よいもん句な所を中程から諷ひ出して古ルけれどよいか
けん山にそつきにけりサアこれで祝儀ハおさまつた其馬びしやくの酒助ケふかと胸を叩いてゑら呑みけんもよ
つほどおまんぢゆひをそらしパマ リウ サンカ よいやなあと角力身になりこれを悦ぶ客は六月の土用の中で

もまんざいをひかせて聞たがりさかなばしで傍にある茶碗た、いて拍子取りあつほりとたのんますごととんそこ
 からおもしろがり此やうなあばれ藝子を奴といふ異名つけて稱美すればのりが来て腕まくり上ヶ濱芝居の物まね
 客の羽織とつて着ておくりがてらのぞめきたいこ持らしひものに行合ふて迂て新八よあほよと大聲上ての、しり
 皆興のさめたるおかしさも又たいこ持の中にも漸々跡の月から八百屋をやめたれやらが弟子に成つて苗字をもら
 ひあんどうへ名を出したつたひとつのかたびらに五寸計のもんとりもちひつばつたやうな黒ちりめんの羽織を三
 種の神器ほど大切に呼ばれば少遅う来て只今向側へ往ておりましたと問はず語り嶋の内てつとめたを官位
 に進んだやうに覺へしいぢらしさは是にハかへつてあへれみありて能客の付クものなり呼屋の座敷へか、が
 と、ハ板本にひかへかわるくつとめて小女童をあしらひ家なみに棒かし一本づ、ひきよろりと庭に植て土細工
 の燈籠ぶらくりきたない柱のふたにした聯も一二枚かけたり此地ハ嶋の内の料理人仲居のみせ出しといふもの
 てそれをつたいて思ひもよらぬ客も来り酔さましに歩行きまわつて此所へ落るもあり近比よき客の入込事おひた
 たしそれかと思へは嶋の内の茶屋置屋の親父曾て色事の出合にハあらずして内のあしらひのうさはらしに此所へ
 来て客となりて大判官の遊び孫に持そふな藝子をくよくや又向ひ側て名の通つた何澤何山などいへる法師折々
 客になつていぢのわるいむりいふて遊び我つとめの骨を休める也種々のおかしみ有て勢ひ強き卦也
 新屋敷 是も右之卦に屬して女郎一段おとりたれとだんくはなやか也ちかき比までハ呼屋置屋もそこく

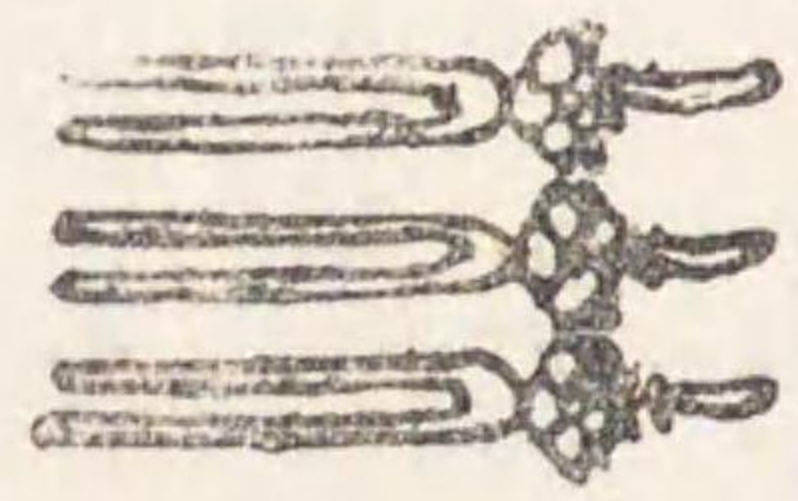
ありしに次第に賑やかなるによりて其隣の豆腐屋又となりの灸屋も仲間入りして軒にかけあんどうをつらね千と
 せ屋松もとやなどめかしかけて終に一トかたまりの色里となりそれ相應に藝子たいこ持も浦て出て遊所の道具皆
 備りたり女郎ハ堀江のおち鹽町の仕かへなど往來しちかき南方の在郷を引うけ木津なんばのふし達入り込つ、こ
 んで遊びかけ間夫の立引のき狀のせりふまだ日のくれきらぬうちからちくごのものついた手ぬぐひ頬かぶりに
 して久兵衛や七兵衛やと呼つどひぞうり下駄かまびすし中にも素人敷入などいふて一段わひしき呼屋もあり婆様
 どぶじやといふて這入るとたれでもちかつきのあいさつして置屋へ呼に走るついでに肴もいふてくる女郎めんふ
 く仕出しにむらさきつむぎの帯焼桐の引すりぐわらつかせ若きハびいとろに綿絲の入つたかんざしやうのものあ
 たまにかざり座について八文粉くゆらせ手あらふない客と見ればおまへがたハこんな所へほんの氣で來やなさら
 ぬとおかしひ所でのほしかける手くだハ相應に覺へたり素人と、いふもの折にはあり近比けしからず色里めきて
 繁昌の所也



おウケツノクハ
 宝結卦
 たゞむび

寶結の堀江の卦也衆人入り來ル事まけし迎イ甚性急也 ○大前髪と色を諍ふべからずかならず力強し。此所船手を請て近來繁昌の地にして活氣の遊ある所也本茶屋といふ名目ありて此宿へはいくわいする女郎を上品としそれより下ニ至て羅生門柳小路まとり町ありあい町の類多し大路地ハ此所の古地にて濫觴の所なれと今ハさびたり阿彌陀池前ハ京北野七本松同格也上品といへとも一座二座のわかちありて新造娘出時ニよつて景物多し又藝子の器量ハ浪花におるて此所にまされるハなし此藝子の色事にて活氣陽氣のよき客いり込はなやかなる遊びも出来る也此里に限らずいづくてもむかしは女郎より藝子をひき廻したるものを今はうらはらとなつて女郎から藝子にひらをいひまたかふ様になりたりとりわけ爰の藝子器量すぐれたれど衣裳のもの好みものゝいひはなしつよくいやしきハ残り多しかり初にも藝子會といふ事有て座敷の嘶にもきのふの會には南から霧山さんと政嶋さんと見へたと一向宗か門跡様の御傍へ出たほどに有がたかりあつたら能イ器量に三寸二分の大ばちシヤにかまへ浮麻の鳥か湖照姫と道行をやりかけ淨るり三味せんを專とし鼓弓尺八までを持あるひてつとめたいこ持の古老ハ曾部子梶忠今ハ後生一へんに取入りたるよし夫より後の若ばへの期間數多ありて拳と打て置けとで座をくろめて賑きやか也隣座敷で強そふナ客の咄ニ七めが此中卯月八日に爰へ來てゑらうさやしおつた一日に拾七貫手放したと錢ざん用もをかし何やら市といふ座頭をよへは思ひもよらぬ手寄りにて比言ハき獅子にほたんをいまだに宙で覺て居て大事の物じやけれどひとつ且那へ上ケませうと有馬の小間もの賣がいふ様なまみついたあいさつしてひき出すを聞ば青ものつくしの宇治

川の先陣中程から中居にふき込んで止めて囉へはまだ上戸と下戸とのせり合の淨るりがござりますとへらす口是もいつそ興となる此所の呼屋の景物遠きものハさだめて音にも聞つらん天にとどろく關取はなやかなる客入込詩人書家俳諧師茶人畫工亂舞がた様々の獸此所へ行かぬもなし此地ハ南ニまけまひとする活氣あれば先此藝子を手に入れ女郎のたばね買たいこ持の大よせと出かけ肩をはつて名を鳴らさは日々いせい強き卦也



トウタイシ
桐葉卦
きてのそ

桐臺ハ新町の卦也○日夜諸國より待人入り來ル事速也○かりかし有て毎夜心のま、也○婦人門ヲ出るに障りあり○太鼓ならば事を定むへし

此卦にあたる女郎ハ十歳にみたさる比より抱へ仕立て禿となづけ其容貌大吉ハ大夫につけ半吉ハ天神につかハせ凶ハ追廻しの小女童となり是も時を得て鹿州の位に至ル也其身禿の比より我またかふ所の女郎のいきこみを見習ひ又樂屋のせりふ内證の物うき事を知りぬいて居てもおもてを高上に仕込ムゆへ爰を大事とつ、しみ其事をあら

ヲ錢ハこつちのじやといひ捨て四五間に過行ケハヲ、イ〜と呼戻すどふじやまけるのかと立かべればヨゴンス
 そんなら遊ひなんせと茄子竇同前辻君さへ西横堀ハ根元なれハこれほどの違ひあり。さる田舎儒者の物語せられ
 しハ此所ハ炭火の有た時から風流今にかわらずどふなはませこふなはませのことばつがひ様といふをスとなへ
 るハ子の字ニテ敬ふ詞也それゆへ油上の豆腐も爰でハひりようすといひ又きやしやな所をいわば内證で禿阿ルに
 もけたいのわるひをけもじのわるひといひますと志かつべらしく申されたり下手な誹僧師に宗匠といへはほゝゑ
 み弱ひ角力取を關取といへは肩ふると同し事てはし女郎でも太夫スといへば心わるからぬていはおもてを高くも
 てなすゆへ也なしみの客にゆびを折モウ何年ンのなじみやと久しく逢ふ事に深く義理をふくみふるべき所ハき
 つとふり逢ふからハべつたりときて□□□□をもつはらにして其情厚し。ぬれの小宿よろづがちくろしきをいと
 わず色情のみをたのしむ色事の出合ぬけつくとつ又外になき味ひなり九軒の揚屋高嶋屋兩いばらき屋佐渡住よ
 こ住次に茶屋も敷しらす其あしらひの意味皆一同也是をはなれてきやら平といふ粹會所ありさすかに外里とちが
 ひて明八よろ又などいふひゞきのわるい名もなしちか比ほの〜といふはあかしやの事にてまろと仕立のこそこ
 そ金魚の中の石くらひも又一興也只傾國の情ハ此新町の古風にとゞめたり客此卦を得て名を上んと欲ハは先揚詰
 にして次に請出すへし高名疑ひなく勢ひ至て強くなる卦也

附 録

色道五ヶ條の占

來 　　る 　　か 　　來 　　ぬ 　　か
 内 　　に 　　居 　　る 　　か 　　居 　　ぬ 　　か
 う 　　そ 　　か 　　ま 　　こ 　　と 　　か
 末 　　と 　　け 　　る 　　縁 　　か 　　と 　　け 　　ぬ 　　縁 　　か
 叶 　　ふ 　　か 　　叶 　　は 　　ぬ 　　か

此五ツの事を占ふにかんざし楊枝扇にても一本持心をおさめていたゞきいづれにもせよ信する所の神佛を念じて
 扇をなけまさまにても逆様にても豎になりたるを陽として頭を左りにし横になりたるハ陰としてかしらを右へな
 し三度なけて一卦をおこす也はじめに投たるを下モの爻として段々後ほど上になる也なけたる扇のゆかみたる時
 ハ豎へちかきを豎とし横へちかきを横と定むかくのこことく三度なけ三爻を得て一卦成る此卦を奥にあらわす所へ
 引合せて其占の吉凶を知るべし

来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり
来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり	来らどして女事の 内子存ぞ 海ふれとどうあまりなし 未だげど 叶ふるあり

海四軒著

善林舎中堂

善浪巷今八卦

十八のねお弁おんべん山翁さんゆう浪花色八卦の巻と云ふ
 午の世の遊里あそびの容ようと云ふお達たつせらふあり
 和山翁の嫡子ちやくしと云ふ人ひとは南邦なんぱうをゆ也

解 題

一 『外山翁』の才筆に成つた『浪花色八卦』が出てから十八年。安永二年(我が二四三三西曆一七七三)に書肆『合中堂』から發行されましたのが此の『浪花今八卦』で、本叢書に、題簽の代りに用ゐた見返し物語つてゐる通り、『色八卦』の著者『外山翁』の嫡子『備四軒』といふ人の作です。原本は三十一丁。天地五寸九分。左右四寸二分。

一 この『備四軒』といふ作者は、本姓及び通稱を何と呼んだか、それは知りませんが、『備四軒』の三字は、孔子門下の孝子閔子騫と音便相通するものゝ、また船場備後町四丁目に住んでゐたとも推測されます。『外山翁』の『色八卦』、『備四軒』の『今八卦』、父子共に浪華に散在する遊里の情偽に通じ、まかも父子共に才筆であつたことが首肯されます。

一 父の『外山翁』は江南の大才亭にゆかりがあり、子の『備四軒』は、この『今八卦』を草するに當り、料亭貴得齋の大屋根の物干に上り、天地四方を禮拜し、二軒茶屋の串を筮竹としてと序文に書いてゐます。その上、父が『色八卦』を草した時代とは遊里の狀が變化してゐるのを目にするにつけ、その變化を書いて置くのが、子としての孝の道であると、自分が筆を執つた由來に

ついても書添へてゐます。「色八卦」の姉妹篇として、安永時代の浪華の一面を知るには見違すべからざる書でございます。

一 この『浪花今八卦』も、『色八卦』と同じく、南木芳太郎氏の愛蔵本を底本としました。茲に同氏の好意を感謝いたします。

浪花今八卦序

亡父おや介すけ山やま翁おきな在世せいぜの昔むかし浪花遊里なげりの情状じやうじやう
 こそ今いま江南くわんなんちや身み代しろ底そこちや一いつ剛ごう澤ざいの
 妙たう垣がきと暮くりおち終しまつてせ八卦はつぱの二番にばん
 成なりり今いまけ書かきと老らうりや交まじりてお卦くわの
 こそはハナガ一いつやま一いつつ時ときを西にしにらんハ
 ちやん定さだ一いつ津つ澤ざい岡おかの地ちを未もり
 りんがの山下やまのした小こ澤ざいの一いつ亭ていありけ大だい根こん

此物かゝりり地味を禱し
 二親類の串成並に印考ふ
 父、色八卦のつまをのせま浪花今八卦
 話り成る卦意の明るる海軍
 よし海軍をあらし
 浪花今山王痛子
 何日新

浪花今八卦

桔キチ
 梗カウ
 卦クハ

嶋の内并坂町の卦也○活氣の人多く来り萬花麗を好み色事時々かわりて久しからす此所八卦の中にてさかんなる
 事の第一也と父外山翁色八卦の最初に書ふるしたる大意はかわらねど其細キに至女郎藝子のいきこみ客の粹が
 やうていしゆ花車中居のもやう天地黑白とわかるが世界のありさまかわり行こそ興あれどじつたれど名八が逆
 様座敷古人正三がからくり庭も皆新しきを求るゆへ也茄子畑の料理屋の亭にふさがれ川のまん中にお山屋の出来
 るこしらへ夜番かへつて丁代を嚙といふ時節免角古ルいの興なし天王寺といふより天長寺といふが當世也といふ
 も理窟がなふておかし扱此卦のかわりめといふは女郎の風俗衣裳の物好杯色八卦時代にハ紋ももやうも大きにう
 ちかちか過て賤しき場もありしが今ハ物好きをこめて随分はすわにならぬやうにぐつとはり込み結構を第一とする也
 外新町の風俗も加へたるていにて女郎のいきはりも色八卦時代にハ役者にもせよ何にもせよ其色といふ物を隠さ
 ず強うあらわにする所却て客へあたり物いひのある女郎程繁昌せしが今ハ此所決てなし其時代にハ色を隠さぬと

いふ強みをするを其色がつてんじやと客も眞の粹をつかふて是をとがめずなじむ事なりしがよく思へば粹ハ
 粹でよけれど大切ツな全銀を蒔みすく女郎の色を知りながら面しろがつているハ粹倒れといふ物質ツは心の底
 がすめず金つかふて其様に氣兼するハ是たわけの天上と諸客ほんまの所へ氣がついて中々今ハ此粹をつかわず一
 へ戻つて女郎に大きにりんきを仕ぶらく色の男が知れてあつても女郎の口から色はないくとむりやりにない
 にせねバあぬ心よく分別して見れば皆客のせちになりたるにて金銀のかわりだけ女郎にも骨折らさねばおかぬ
 といふ物になりたり女郎もよく爰を知りてみすく色を隠しつめおの様ならでといふどびつこい場を□□にてつ
 とめ廿年前迄田舎客にあてがふた所を今ハ地の人に持てゆく也却て田舎客ハ負惜みにて粹にさはき皆せりふも
 あちらこちら也宛に角此所へ入込ム客ハ利口過るが病で別て中より以下の客など其穴もすかさぬ此穴もくわぬと
 座敷かす、どうて外から見ると傍に來て居るたいこ持の方がやつとのどかに見ゆる也持て出るさかなにさへ心を
 くばり此暑中に口を焼やうな玉子とちも面しろい此次の吸物ハなんにもなしにかいわり間引のすまし仕立である
 ふ最ウいつもの青葉が出る時分じやと板本の性根迄さがすつれなし又藝子の風俗を見るにかの奴といへるが
 なる一ツ體すたり藝より色をかざる事を専とす昔色八卦の時代ハ色といふ物をかたくもてなし客がほれたと見
 る程かんじんの所をかたくあしらひ花車中居に客より吹き込み色々客に骨を折らせたうへ身のためになる事ど
 もかたう約束して□□□□及ぶ事也それゆへ客も藝子と契るハ世界にない物を我レひとり得たる心にて味ハ

ひも情も格別に覺へ扱々どき落トすに隙の入た筈じやほんまの初ツ物であつたと□□□□□□おまんたらん
 かたわきで聞て見れば此藝子跡の月の事であつたさる寺の和尚と心中に出たのをやうく連れて戻つた子ハ□□□
 たけなと埒もない噂此道も料理と同じ事てうつわ萬事くわせ方が第一也今ハ此やうな藝子の場なく色する事少も
 はゞからず中居相手にツイする嘶にもかこうさんならワシヤ□□氣じやと名の高いほうぐわんにハはやあてがい
 □□になるゆへそこでかの大はうぐわん思ふにハおれとさへいハバどいつでもすぐに出来るム、コリヤどいつもよ
 く□□じやと悟がひらけるゆへあいそつかしてふた、び目もかけず爰でひとつかしがあるとドッコイいやじや
 と踏とまるとコイツ手ごわいやつじやとはうぐわん面しろみが付て是からせりふつき戀らしう成てついにハ請出
 しといふ物になる今の藝子衆爰等をかてんしたがよいと今引ている古ル藝子の辨々のやうになりたるがいふたも
 金言也かう今のやうに藝子が箸早うてハ職がたきの咽じめに同じく女郎の□□じめといふ物也又近年ていしゆとい
 ふ物も甚粹がりて切レた事もするゆへひくい客をとる場もあるから自然とくろかり茶屋ハいきつく事多し又
 何年立てもりちぎにていしゆハめつたに座敷へ出ぬものと心得客か芝居ばなし仕かけると只今の藝ハ兎角理窟が
 つまりませぬ朝から皆にくいくと思ふている一日のむほん人をせび四番目で首を打タねばならぬ所をねつから
 かすり疵も付ケず今日ハ日もばんじましたれば是切ではたしますると哥右衛門が斷をいわれまするとふもすまぬ
 事でござります扱こちの方のねり物御らうじて下さりましたかといへバ客されバ源氏じやそふながあの鈴蟲とい

ふにあたまに矢をさいた娘ほどふした心じやていしゆ答てアレハ私も存ませいでとつくりと聞きましたらかるかや道心の上るりに新洞左衛門が娘ゆふしで使者に參る時心を亂さんために錫の御酒徳利の中へいもりを入れて其酒をのましたといふ仕組錫の徳利の中に蟲が入つてあるゆへッコデすゞむしでござります能ういたしました大將でござりますとほめるさりとハ唐やまとをさがしても此やうなわるい趣向も又とあるまい必竟仕立がきれいなれハこそ趣向ハ耳も當られぬ次第也めんよう此ねり物の作者ハ菊天じやといふ評判いとしなけにナンノ菊天じやある皆思ひくゝにむちうにくろがるの也此ていしゆ折ふし居つゞけ客があると表の格子の間へ座敷まはりの男を呼ひ小聲に成てまだ旦那歸らしやれぬア、氣の毒なコレナヨトみつ寺の地藏さまへ參つて足うごかしの願をかけておじや足どめでないぞやといひ付るやうな馬鹿茶屋ハ代々伽羅もたかすへ、くゝと花車がついせう笑ひして今にかどをたやさぬ也免角ワツといふ面しろい茶屋ハ身體のもてにくいも客がとらうなるゆへ也客にも名代斗で實入のないけんしき倒れといふはうぐわん多ウし此地ハはなやかを表にしたる所ゆへ客にハ上中下色々品ありてつかひかた甚不同あり奈良じまの客があぶない物でもなく上布の客が當になる物でもなしなりのきたない客にも目利してぐつと遊ばすといふ亭主の肝ハ此江南より外になし茶屋のはなやかハいふにも不及中居の切レル事爰に極り茶やも段々あらたなるはなやかな茶屋出来るもやめるも早く是皆繁昌のするどき物也古き名代にてハのつとり貝半てつくり大七はんなり川作つさり井筒まつとり富市若江傳九どつこい大藤ハ氣丈もの山がたのせ春てし

六堺市堺清丸庄角ト丸も能く通り其外嶋の内道頓堀側數もかぎらぬはなやか茶屋いちくゝ云ふにも及ばず芝居側で能くも賣れたるハ八百六扱近年ちくごの芝居の向ひ濱茶屋に堺屋三右衛門といふ芝居茶や出来たり遊ばふと云へバなんでも呼にやり此あるじハ竹本咲太夫也此茶屋女房と支配の人に渡してあるじハ決て茶屋のていしゆならずさん用きか客あしらす年中ちやり淨りりの趣向斗を工夫して芝居見にくる客もあそひに来る客もわが音曲の徳をたふてくると覺へ客の座敷へ折にゆかたがけで提きせるで出てわが淨りりの當つたはなしいふて仕舞ふとツイと座をたつ客とめて酒一ツといへバ酒ハ嫌ひじやともぎどうなこたへ誠に芝居かゝりにハ珍らしい變物也免角人ハ名の賣れるといふが肝心粹にも株のあるものでたとへ少勞へても粹株を持たるハ今に用られる事で南でも誓叟うなづけバそれをよしとし東南ほむれバ人なるほど、同意する前曾道といひし株持近年八幡山と名をかへ弓矢八幡粹を止メず此むれに色々株持ありたれど今ハ小むつかしい人になつてゐるもあり是らハ粹艸臥といふものにて橙のおとろえなるべし又年古き株持にりとうといへるあり諸藝つたなからずして何をして當うといふ工なく富もせずまづしくもあらず只物にこらぬ遊び好眞の野等といふハ此人にてついにあしき評判なく能い噂もなく嫌ひなく誰にも付合ふといふ名物賣買にすると是らハ取わけ高い株しや近年ハ頭も半白となりかけたれハ衣裳萬たんはでを止め同行かしらかといふやうな貝の親父風俗なればまた勝手知らぬわかはうぐわん喰イかけて見て跡へも先きもゆかずツイに降參して三略の大事を聞く事也又此人の人柄甚こうとうなるゆへさる方の番頭申

スハ此方の若旦那の事萬事貴公様をお頼申すとあれりとうこたへて大船にのつたやうにおもわしやれと請合ひ段々此息子を引廻らされしが大船に乗たやうにと請合ふたも道理随分太長い帆柱ほどな趣向を立させ遊ひの沖へこぎ出させ水の音に引かれてとふん、粹に仕立一ツの株持にしてやられた兎角粹のみばへを守り立て血脈のたえぬやうに骨を折る浪花の一物也一能あるものへ用られずといふ事なく足を能巻ものへ則巻足と時の帝より官名を給ひ是又一ツの株を得るはうぐわんに又粹株ありて粹甲と世に鳴りし跡今名をついでさかん也李の郷に住める助松はうぐわん近年高名又爰に浪花の眼なる町に鐵といふはうぐわんあり替名ハクワクといひてクワクハ霧の字か只千年経ても心の替らぬといふ事此人一體見元を取ル事ときこへにせいをする事ハ甚嫌ひにてばたつかずうわつかず氣の高い所此はうぐわんにならぶものなし浪花江南におゐて名を求んと欲するものハ先ツ遊亭を撰事なるに此人一ツ反ちなみたる人を捨ず人知らぬ福新といふ茶屋を引立堺清を捨ず自身ハ諷ふ事も好まねど長うた好きにて法師續いて藝子のさらへかうなど随分のとやかなる遊ひまかも下戸にして座あけず近年の妙物也左右の人にハ越左桐鳥其外辨慶かぶもてうしにのつて顔をかへる事か嫌ひ甚よき捌といふ所也近年ふと竹本綱太夫に出合ひ甚氣に入り懇望せらるゝ扱此綱太といふハアノ小音にして見物の耳をゆかへ引付ケこれを能聞かすといふ名人淨るりのかたり打におゐてハ今の世の上手此人に及ぶものなしちいさいなりして座中を腰に付ケる筈也かゝる上手ある太夫なれば人の氣に入ル事もはやく是ら太夫中の粹にてそのむかしハ俄に名を取り愛のある事此や

うな太夫もなし此綱太右のクワクはうぐわんにはじめて逢し時クワクより送り物有しがある日クワクはうぐわんの宅へ綱太夫まいりあないして中戸前へ通りしが綱太が跡に日雇とおほしき男二人付キ來たり中庭を鋤鍬にてめつたにほりかける店の手代中仕おどろきは何をするのじやとがむる綱太夫まばしと押とめ是にハ段々様子がござりますお目長う御ろうして下さりませといふうちクワク大盡内より出是ハ太夫どの何事かと申さるゝ間にはや中庭幅一尺底へ二尺斗件の日雇ほり込みけれハ綱太夫日雇をひかへさせ扱旦那様へ申上ます先日ハ身にあまりましたる御音物ありかたふそんしますがお禮のおおぎを致しますのがどふでも頭が高うござりますゆへお庭を是程堀らせましたと右のほり込だる所へ頭をつつこんで一禮をなしたりクワクもあきれはくゝいたみ入と手をたゝぎ子共よソレかなだらひに湯を取て太夫殿のあたまをあらふてまんぜいといわれた綱太ハ日雇にそれゝと知らせハ山土二荷になひ込み右の穴元トのことくにうづめて扱おいとまと綱太夫ハ歸りけり兎角はうぐわんハ仕似せが大事にて金つかひながら辨慶のやうに見ゆるはうぐわんあるものふと臺所酒のみ付ると其くせがつくものじや糞仕のわるい客ハ茶屋にもめいわくする事也油屋三蝶世にあられし比ぬるいのなんのといふたけれと又是程のはうぐわんもめつたにハないもの此人のはうぐわんかぶ其跡が遊んである望ある人此株を譲り請て相續すへし岩二も古人となられたよし此所の封ハ強氣はなやかにして此所近きに住む人にハ僧も醫者も粹をつかふ別て此所に療治近年大ウはやり英才の良醫あり病家へいても病の見立のよい上に粹をつかひるゝゆへに病論の外のはなし

に病人も氣をはらし今志か、つた頭痛もツイ忘る、ゆへ此人の徳を名茶になぞらへ一チ森さまくとはやる也世の物好といふものかけ合ふとかけあわぬがある事なるに近年の中居の前だれのひもめつたにけつかうがよいと心得大峯大先達のゆるし袈裟見るやうな裂を尻に巻立よつほど氣の毒千萬な物中居の魂魄が前だれの紐にとゞまつてある事也下々ぐりをあらわしてするも大夫といふ場にはない事免にかく小女童小奴にいたる迄肝のエイイ所がごの者の尻のふりやう迄が外の里より伊達にて強氣はなやかなの卦別て六七月大事にて卦意を信じて力を入れて通ふべし

此所をはじめ牽頭の事を出さぬハ
牽頭素鑑
右の書近日出しゆへ沙汰に不及い

龍 膽 卦

蜷川曾根崎新地の卦也外山翁卦の面に新町に京の祇園町をくわへし所とありふしぎなるハ此父が色八卦の時代に少もかわらず女郎藝子のいきぢも前にかわる事なく女郎ハ所々の仕かへも流れも入込ムと爰の風俗におしうつるゆへほいやりとなるほうにてかどへなければども一ツ體ぬるし其かわりに下作にハならぬほう也蜷川北かわ東のはじめより西の果迄茶屋の間々にある刻多葉粉屋ふくろ物や惣體もやうのいきごみ寸分前に違はずかわりたるハ南

かわの菱屋鯉屋松坂屋面影なきこそ變卦也あふみ宇平治といふたいこモウ七八十でもあろふがやつはりケンが強ひ自慢しているけな前體濱手の客ハ老若にかぎらず遊びかたのいつでもかわらぬものにて一體此所てうしのくるわぬ卦也

此變卦に中町といへるハ色八卦時代より甚おとろえて今ハやうく二三軒残り客ていハやはり藏やしきの下役外記左衛門たん平など其外存もよらぬ年寄客志かもいんつう澤なるがなんぞ外の用のやうな顔してすつと内へはいり裏座敷であいかたをよび元トより下戸なれば酒ハ禁じ河内やへ卅二文のつべいニツいふてやつて女郎と鼻つき合ハして是を喰ひ(此ノ所十一字抹消)つとめるとひぢりめんの下ぐりぐらひハ請合ふて去ヌる是等爰のふところ客也

又こつほり町ハ蜷川の東に續きはるか品くたりたり是も色八卦時代との相違して今ハ近き町のはたらき人あるひハ在郷人打ましりむせうにくろがる皆いくたり來ても色せりふにて扱々あつかまし女郎ハかへ詞のせんほうあがくハ扱置きさんせう迄いみそんじやナイといふ事をいまだにいふて居る所也爰の露地を行ぬける時扱さたないのもある物じやと思ふて立ている事かならず無用りんきする男がうしろから足かいてこかすもの也恐るべしくやまさきといふ所是も近來のわき物其はしめハ料理屋田樂屋におこり花火の見物所なりしか今ハ色線香を焚て一ト切二タ切の定メとなり能肥たらんちうもあれハ素人出の三曲もありはいつたがさいご外へぬける所なく是を號

て鼠袋町といふ屏風の極樂おとしにかゝる事疑なし

同色八卦の時代になかりしなら村屋敷梅が枝新地大經寺前新屋敷といふはおはつ天神よりいなり山の近邊菜種御殿といへる右五ヶ所大かた同時に涌出せし所にてむせうにめかしかけ客も園八ぶし専やりかけ歛遣ふ人少はね付るやうのいきほひもおかし爰等皆むせうにすがり南のはやり詞をすうきを以て聞付け覺へ自慢もおもしろし

鶴 菱 卦

高津新地六萬臺 勝曼 尼寺此卦にあたる此高津新地ハ色八卦時代も世上の請あしく淋しかりしが年々におとろへかけ行燈もまだらにてらせつりがね筋ハやつはり在所者を引倒しみぞのかわハ家ぬしよりちか頃普請ありて家居あらたに向ウの大みぞも掃治しただけ當分の嗅みもうすし夕口の祈禱者おろし藥やなど浪花のはきだめ所となり遊所の姿ハなしどふぞして持直しハ有ルまいか日々此所にて商賣にかゝるハ惣嫁問屋斗也

六萬臺前に格別相かわらず平野邊より南の百姓綿の出来はつほ麥のぬすみだめ爰にて消行ク事也ふごを一荷になふていそくハはいるとあるじの親父等田なべの彦さんなんと思ふて出て来てじやイヤけふハさやしに來たと荷をおろしどふじや磯めハまめなかと尋る唄こたへてまめな段かいのおと、いの晩も向うの鑰屋ハ客衆といてなんじやら云ひ上がつて磯さんが二八の鉢を庭へ打付けてわつたけなきもな子でハあるわいな、なんでもけふハあいつ打

て取るホンニ親父此志る物よいやうにしてとふごから布のふくろとり出す親父口をほどいてコリヤ赤豆じやないつもの志る物ならうたしかへるけれど赤豆ハいやな物じやなアハテ扱赤豆じやて、同じ事じやテウドそれが九升ある志かまよようにゑるのじや親父あたまかきく、めいわくな物なれど廿四文がへて九升メテ貳百廿四文それよりハどふもならぬ客それでハ安スけれど氣がせくまけてやろふヲツソレ唄磯さん呼んでこいアイと走る客わらんづ解き奥へ上がる蛸の足二本に酒一トてうしたんほにてこしらへる客聲をかけヒヤがよいぞく、といふうち女郎くる此間京之介がかるわざ芝居で聞て來たキタワイナアといふ哥を女郎小聲にてうたひく、奥へはいる南の方から茄子志る瓜になひつれて爰の内を見入れ彦兵へやハ來ているか戻りにくるのじや、といひく、走る所柄のもやうおかし

尼寺前やつはり前のごとく門口に立はたかつて志るものがみづから呼込む所ハ品くだりて前の通じやが近年よき置屋出來て堀江なん地の出みせ新やしきの出ばりなどありて呼屋も段々出來て女郎もよほどめかす事客がひどう酒に酔ふと女郎いたわりこのやうにゑいなさつたにハうす茶がよいといふあるじのか、が志けさんこい茶といふのもあるそふなナアハイそりやあるけれどなこい茶といふのハつねハのまぬのじやわいな元日に紅絹のきれにぬいこんでふり出して酒でのむのがこい茶じやわいなととそと取り違へて見へるこんな事いふくせに客がふとはなしにきのふ千日でごくもん見たがすどかいの久助といふやつじやといふト女郎ム、それハこわい物御ろう

じたなッリヤすいほうであつて廿四ヶ國が付てあつたがみせ出しが有ったけなときぶい事いひ出してあらけるあ
んばい茶の湯ばなしにかけ合ぬそぎつぎなおかしみ免に角近年はなやかめく事也

勝曼色八卦時代とハ大イにかわりはなやかになりたるハ此地也坂のほとり能置屋呼や出来随求門前の新茶屋より
清水のあたり迄つゞく隙ナ日ハ女郎うち着のゆかたがけでせんだく物の相槌打て居れどおくり込ム段にハ越後じ
まの紺がすりてりがきにかのこ紋勿論藝子といふ物ありて餘ほどはなやか行者講の參會平三郎で酒ゑんふつと呼
んだ藝子のつりで山一組の大先達なしみ出来て講中も入込むからなじみ女郎の鏡臺にだら介も絶ずやぶいのたぐ
ひも入り込折にハ詩のかいた扇持ている女郎も見へ龜野さん子細らしい扇じやナアと呼屋のかゝがとがめるとア
イこれハな學文の書である扇じやと答へる又山伏とも見へぬ客爰な呼屋にて大ウだて夜なか時分にコリ
ヤもてぬといひ出しこれから畑へねぶかぬすみにて此肴に出てある鯛をなんば煮にせふと云出し女郎藝子宿屋
のかゝ引連して物好きの遊び取つて戻つて酒になりくぜつになり女郎がいふにはワシヤまんじつ女房になる氣じ
やと聞いてくだんの客そしたらありやうの事いふてきかそおれハ生花の先生じやとおのが口から先生といふやう
な間違ひ者も入り込み賑やかに遊ぶ事也

花

菱

卦

安治川

靈符

八軒茶屋

編笠茶屋

眞田山

玉造

同新宿屋

安治川 色八卦時代に替らずやはり船手斗の所外の客筋まれにて少も前にかわらずかわりたるはひぢりめん湯
具古イのに新しひはつかけも止みすつはりとした事觀音丸の源様春日丸の七様と客のわざになれて女郎も能目
見る也

れいふいたうとくも天満宮の東どなりにて參詣のなぐれ足爰へ立よりおかけをかふむる爰も甚はなやかめかしの
くのなじむのと東天満あたり色事する若ものも入り込み折にはもめん問屋とも見へたる番頭男注文で町廻りのつ
いでに立よりなじみへ人やつて扱吞かけると何かなしにたこのつづく一切に生妻酔ひやし物の替りにハ宮の内へ
西瓜の切り賣を買にはしりナントよかるがなとあるじの女房が仕こなし顔切れる鼻じやといふて客相應に悦ふ事
親父へるすかと客の尋ねにサア聞てくれなされもあのこちの親父の哥をよむのでたいい隙がとれてめいわくで
ござりますその壁に皆はつてござります見ておくれなされといふ客ドレと壁を見れば如瓶評でした五文字付の
卷也哥と覺たもおかしくこんな所ハ折々ゆくとよいはなしがあるもの也

八軒茶屋 此所れいふうに近しといへどれいふとは大きに品かわれり女郎ハおじやれの姿ありて素人づくりのた
い也客ハ侍に親父客旅がけの商人など望メバ貳匁五分膳も出来女郎ハ表ハ前だれ客が來ると衣裳着かへめしくへ
バ給仕する酒のめ酌する色八卦にハひしかん板の首などハ人がくわぬゆへ今ハとんとない事表に見へるが正味

の首もお講に参つた禪門など新門からはいつてそつと遊び御堂の役所へやろふと思ふた包み銀の一兩ツイ女郎に
さし出し汗手ぬぐひなど買ひしやれナンマミダ〜
編笠茶屋 すゞめすしに店をかざり北の方の家じりに入口あり客てい萬事前にかはらす多く町色事の出合に繁昌
する也

眞田山 玉造 新たち家

此あたり前に相かわらず品くだりたり新家の方も在所請なれはか〜しき事もなく玉造いなりのへんハ近來ま
ろ人出多ウし肉喰ゆだんすべからず

蔦 菱 卦

上鹽町 野渡町 馬場先此三所今ハ皆一ツ也一丁目ハはるか品くたりたり右三所の呼屋皆はなやか茶屋置屋もれ
つきと色八卦時代にハ大に風俗かわり近來甚はんなり也前ハ青梅しま糸しま黒袖下着に伊達を見せて奥ゆかしう
後家出 てかけ落 浪人の娘なと、いふても誠しけにあつほり所なりしが近年繁昌するにあたがひあんの色里め
かしたいこみせ行燈か、やかし女郎藝子のいせう随分はでに鳴の内にまけじと力む事也馬場先鹽町呼屋はなやか
に數しらす辰らん せとしけ 能人の耳にありのど町にてハ古人春羅二斗庵のくつと若い時分茶瓜といひし比又

前之蘭古右三酔の逗留の中東方庵と號し一亭あるじのあさなハアワテともいふ其外田中屋跡も居をかまへ又目に
たつハ熊坂やといふのれんさる客是を見て大きに剝そふな呼屋じやといハ此所の座持殿こたへて全く左様でハ
ないちよつと來たお客でも足がとまりとふ〜翌日の朝めし喰ふてお歸りなさるゆへ朝飯から出た熊坂屋でこさ
りますとやつた置屋にハ森田屋といふものはだちて女郎萬たん今ハけしからず高上めく所ハ繁昌してよけれどま
へのやうな雅なる所ハうすくなりたりまかるに爰に一ツの隠窟ありのど町馬場先筋より半丁北に表口に卓子の表
札をかけて貴得齋といへるあり此あるしハ人の知りたる粹株持にて異物の類也前體此野渡町の呼やのすがた先ツ
ずつと持て出るとさんもまつ四角なからくり臺のやうなにいやみな盃兔角切すしといふものハ出さねハ叶ハぬ事
のやうにこれが爰の性根にて酔のもの出してひやし物出すともふ此上ハ地しんつなみが來てもかまわぬとなんに
も出さぬ事じやと心得て居るが爰のおしきせなるに此貴得齋といふは先ツ客這入るとなんじやも知らずソツと詞
がかゝり座につくとずつと出す酒さかなうつわ一トきハ物好ありて只の親父ならず料理ハ甚心をもちひ又ある時
ハさわ〜と安う付ケる料理にも面白うくわせ名イ飯何時でもゆきが、りに間に合ハせ料理ハかあいそふにはづ
かしけなき事也ていしゆも馬の合ひし客にハ座敷へ出てさま〜とうがち咄折には取ておきの三絃にておかしい
こへで長哥も一興先藝子呼べとも女郎呼へとも云ハす女房ハさすが其客々の氣を汲んで相應に呼ひ物あてがい面
しろがらす事じやていしゆの馬の合ふた客に座しきへ出ているハよいか其間に料理場ハ料理人斗なればさかな等

の仕打只の事になる也此所の女房といへるも是迄けん氣も又面しろみも色々として来てもはやとしもあまりたれ
 ば少も粹のつかいたいたい事なけれど親父かゝる仙人ゆへか、狂言を若う衆太郎が藝の性根にてつとむる事也なん
 ても女夫ともいやみのないのがうまい所じや大きからねと座敷へ通れば東請にて向ウハふるの山根生駒打つとき
 庭も作り捨ていやみなく芭蕉に雨を聞きかたゑに蛙飛込む水の音ともいふべき池もあり垣をひらきひかしのか
 たへ四五歩ゆけばはたけありて茄子間引菜などおのづからなる露を持只市中をのがれたるこゝち涼し何にもせよ
 此地へくる人此所へ來ぬハ風流の至らぬなるべし此比も隣座敷へ十五六な美しひ藝子が來て三絃つぎかける何を
 ひくてあるふ大方一ツ夜着あたりであるといふうちひき出すを聞けば年をかさねてよわいお客ハみな門口てお禮
 申すやとわるくちの手まりうたいまだにうたふさりとハ腹をかゝへる事爰等が此所のむかしの残りたる所敷二三
 年もまへの事であつた女郎が呼屋のかゝとのはなしにさゝやき聲でいんまあその細間でいたちさんに逢ふたと
 いふのを此客聞取つていたちに様付するからハどふで猫又かなんぞばけものであるふと買せてにして裏道からに
 けて戻つた客があつたさまふととおかしきもやうある所殊に此近邊諸粹ありて一筋西へ行と鹽町七八丁目にも色
 々の隠士あり八丁目にハ南柯といふ多能の人は是も粹の株もちにてなんても馬場さき段々繁昌近年のうちぜひねり
 物が出る筈其時にハ作者にハことハかゝぬおれといふものがひかへていと南柯樂しんで居らるゝけな近年陽氣
 日々にかさかの卦也力を入れてあそぶべし
げんせうじの行當り駒が池のほとり評に不及

檜

扇

卦

なんは新地の卦也此所の女郎藝子の新町にも堀江にもかまハ近き嶋の内を敵として是にはけみ合ふ心ありてか
 へつて力む事強し近比ハけいこもけいをはけみ萬事はなやか也嶋之内のていしゆ中居色事出合の場此中にも女郎
 藝子に甚異なる事價かわらずしてゑほうくわほうある也爰も色八卦時代にさしてかへる事なし
 新屋敷是も此卦にそへす此所ハ前體むかしハうきすといふて船かたの客入り込し所大イに繁昌せしが中比とんと
 さび渡りたりしをちか比又みせつきをはじめ萬事はり込みしより又立なをり近來ハ女郎藝子もはなやかに衣裳ハ
 坂町にかけ合ひあると出といふ物ハいづれのさにもすくなきものなれと此所にはくろとこのまるとといふもの折
 々ありかこわれていた女郎のきやくにはなれ親のうちまいくしてゐるうちあると同前になりマア三月出て見
 やうといふやうなもあり又せたいやぶりの中居などくろき中のまろうと是を黒肉といふてうまみのある事也爰ら
 を考へあそぶべし藝子といふものの中々長哥でハとんと間にあハぬ事園八ぶしといふものあたり淨りなればや
 つこの道行とあしかりと二はん覺へていれバ耻ハかゝすけいこ三味せんもつと右や左りの長者さまとめりやすう
 たふと客も心得扇さつと押ひらき中役者の物まねさわざどう中へ夜なきのうどん屋呼込ムもおかし兎角近年ハ女
 郎大キにはなやか相應のせんせい賑ハふ事也此所の置屋の大將ハよしのや女郎數多あり續て播新さつまやよきま

ろものを出すなんでも今一段はやらそふならば此通り筋の町幅をもう五六間廣うして西の濱のつき當柳のある所に出口の門をこしらへ東のすだれやのある所に同じく門をこしらへ御堂筋から道頓堀へわたるやうに橋をかけ女郎にもかぶろを付け日傘を男にさしかけさせておくりこみ新町のうつしを仕たいと此所にとし古ルい分別者がいわる、ゆへなるほどそれよかろふが先ツ引船かふる引つれてハそれ程の人数のはいる廣い呼屋があるまといへばイヤくかぶろやかさもちの男ハおもてのみにこしかけさしておくとあるやぶいか山ぶしの供のやうでおかしからといへバイヤまだかんじんの事をわすれたやり手に跡から蒔繪の竹の筒にせんかう入れて持たすとやつはり新屋敷がはなれいでおかし近比めつきりはなやか段々はんぜうすべし

黒船新地 ひけそり近年のわき物ひけそりもかけあんどうにてめかす事也うちまけのてんがうしが卅日女房を出すなどひやうしがなをると銀立てつれていぬるなどこれらまると出にて折にハあれど兎角出入せわしき卦顔のハる事早し

なんばおくら堤近比新たち家ありてこそこのものやりかけたれどはかしくからずなんちの野かわ七けんの將門茶やといへるみせ付のるい出来れども格別の事もなし

寶

結

卦

堀江の卦也衆人入り來り迎甚性急也と外山翁前卦に申されし通此所其時より格別かへらす少いやしみあれど器量よき藝子を出す所にして女郎けいこのかね付袖つめなどはなやかに賑はしき場所銀つかひといふものでなく錢つかひといふもの、多ク入込む卦也

桐

臺

卦

新町の卦也此所の萬代不易の容なれど時々となりゆきにて外山翁時代との相違せりかへらぬものハ道中八文字揚屋入のすがたと女郎のかりかし門ンノのかため太鼓のさため也いつの比よりかわざに別のみせ付キ此物すきハとんと新町けをはなれてみせのかざりもあやつりの四段めとおほしき道具にて此さま少おとりたれど先ツ賑やかなが一興其外横町々々鹿州茶やもそなへよくない別て此ろくじうといふ物近年のはやりにて天神をあやまらすほどのいきほひじやといふて僧正坊といふ也此所の風俗大やうにまづかなるを元とするゆへ六月のにわかもやつぱり南の風にてハあたらす新町にわかといふ物一ツていあるも尤也太夫の風俗も十人が中にふたりハ少ぐわつさりもあれどせりふ仕うち備えを亂さずくるわといふ場をすてぬこそ命なれなんほう色をきかしたるすいも年がおいこんで目尻に小おわが出来齒もみがくといいたむやうになつてハすいがつてもくろがつても女郎の請あしき物爰でこそいんつうといふ物でなければいかぬ所大病人に人參のますといふ場也いんつうで色をもたすとしより客ハ

とかく新町でなければ叶はず始人などの手にかゝるとあつちの勝手斗してヨイヤサとむごいめにあわせるこれちんそこつたなきゆへ也嶋の内ではやがる事ハ新町でもいやな筈なれどせんたいかぶろだちより客のつとめかたハかうした物と覺へ込み□□の情を大事につとめる所ゆへ年寄り客をやらすやさしき志ありほれるでない自然と其情になれたる物にてつたなみのないゆへ也若男のわけひきあしきには大イにはぢをあたへるやうの事あれど年より客をやるといふハ新町になき事は南京といまりとほど情の違ふ事也此味ハひを嚼しめよろづぬるい所に面しろみ有る事を覺込し客ハ一生忘れず七十に成ても八十に成ても銀つかへハくるわへ來る物也大夫の情にあけ屋の姿かけ合ハねばゆかぬ事三寸八分のばちで長哥がひける物でなく細い糸の胴へまみ込やうな音じめで先年江州たながみ川がかたたる、物でもなし此所ハ□□の色情厚くもてなし姿はあどなふ仕立る此段ハ女郎斗の事にあらす諸藝者にもある所藝にハまみて姿にままぬやうにするが則上手也高いの也藝にしむとハ執心あつくこる所すかたにままぬとハかたちに其もやうなき也たとへハはいかい師がよそへいてのあいさつにも五七五を合はせて

—お宿に歟用事が有りて御意得たし。と切レ字返入れていふたらうつとしようてたまるまいなんば新地にちんぞうぶれをする男—さるやしき出ほん肉ちろと福新から出られます近年のちろ物でゴザイといふが名代にて皆人の耳にとまる此男つねに途中でちかつきにあひ—今日はきつうあつうゴザイとやつはり新造ぶれの音聲ちみ付てある也竹本芝居の三絃に蘊澤文藏といへるあり淨るり三絃のどてんせう扱人柄ハ公家のおとし子かとも見へすがた詞

にも三味せん引らしい事少もなく一入上手にぞ思へるれ免角片いぢハ下手のはじめある人かぶき役者の評判に藝に少のくせなく丸うするハ象太郎也といへバ傍に居る片意智先生の曰イヤ〜象太郎にもやはりくせがあるム、どふしてくせがござりますと押て問へハ件のいぢ先生曰其丸うするのがかれがくせじやといわれた栢がなつて有ても木ハ椎の木じやといふやつにハのいて通すがよし新町の風俗ハくせのない所が一段高上な場時時のはやり詞を禁じはやり染を着ず萬事此ていゆへぬかつて見ゆれど是くせのない上品也近年くわくちうに現銀賣の料理屋みせなど出來たるハつらいけれどくら物のはやるが當世の風俗本町から北の堺筋に夜みせの肴屋のある時節なればせう事がないかていのはうぐわんたりとも此新町の味覺ざるはどこやらあそびかたに目がつまぬ也ちまち大夫の請出し千三百兩見事此はうぐわんの商賣すじ千三百兩が米をつんだらよつほど見事にあるとぐちなわろがくやむもおかし是につけてもおしき粹のかぶ持ハ川崎やがぶつ急度はうぐわんのかぶ持最一ト度はなやか見たいあたまの兀るがおいしい〜何ハ兎もあれ名をなさんと思へば浪花西方淨土に至り九軒のうてなにのほり佐渡や町に紫雲の櫓越後町の音楽爰にはちすのうへを契らすんバ青々たる凡夫粹道にうかみ上がる事あるまじやくしかけを買ふ鍛冶やの五郎介も五郎す〜といわゆるバまぜんと髪も五たいづけにする事を止て腕まくりせぬやうの氣になる則これが人柄の能なるゆへ也鹿州とても心ハ松の位にならいかいけりして政野ヤアと禿よびつれるすがたおかしもあるけれど斯する物じやと覺へし所つくり物にあらずうるハし此所の卦意ハはじめて入つて中程

にぬるしとうとみそれより外の遊里を経て至りいたれる所又此地へ戻る十を経て一に歸るの卦也人間六十一の本
卦より格別面しろみ増す所也古人はい人の貞巖杖にすがりて龜菊大夫に夜毎かよひしも此所なれば也信をあつく
して通へば不男たりとも色が利出すといふ所の爰斗也信すべし

附 録

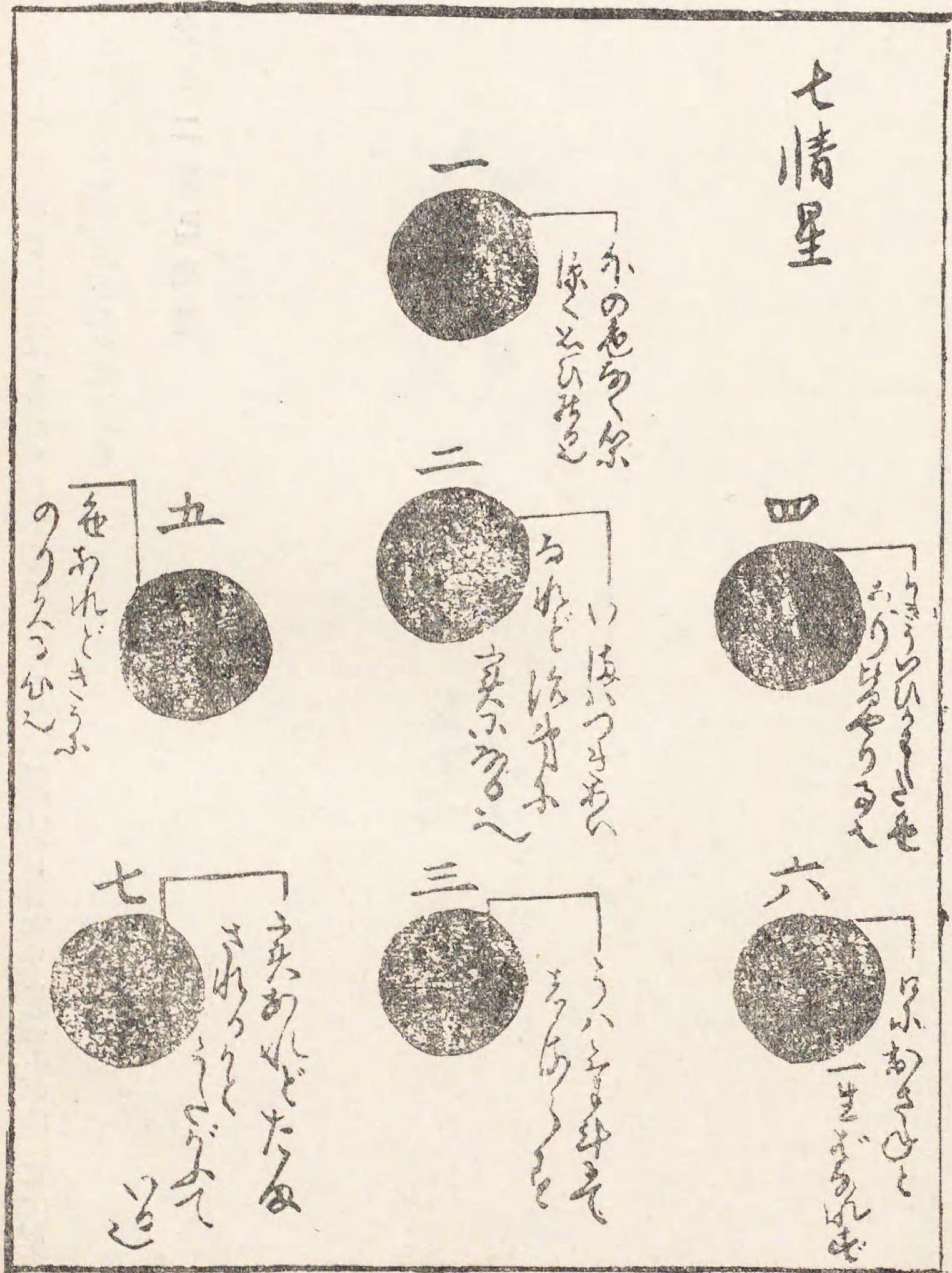
七情星の占

女郎をはじめ地の女にもせよ色事にて先キの相手の虚實様體をうかゞふ 占也女より男うらなふもくりかた違ふ
斗奇々妙々の占也

占 法

左にあらはす所の七星うらなわんと思ふ時女を二十と立テ男を十と立テ合はせて三十也占ふ日朔日なれば壹ツと
入れ二日なれば二ツと入れる卅日迄其數の通り入れるたとへハ男女合はせて卅と立テ占ふ日九日なればこれを九
ツ入れて卅九これを七拂といふて七ツつ、ありたけ引く卅九の内五七卅五拂ふと四ツ残るこれを七星の一の志る
しより次第に二三四と右の残り四ツ目の所を見て知るへし女から男を見るハやはり右の通りにして残りたる數に

七情星



今以三八卦

浪花今八卦

て星をくる時七ツよりきやくに六五と逆にくりとまる所にて見るべし此占ハ只男女きよじつ斗の法にて十か十ヲ
あたらすといふ事なし嘲るべからす信ずべし

安永二癸巳晩夏

三〇

解題

一 『浪花花街今いま八卦』は、『色八卦』及び『今八卦』の姉妹篇です。著者放蕩軒の傳は、今、知ることとは不可能ですが、その序文の末尾に、色八卦の外山翁、今八卦の備四軒、この二人におよばぬことを譏る人は、また粹じやないぞ、との意味の氣箴を吐いてゐるところに、著者の自信が顯はれてゐます。

一 『色八卦』は大才亭の厠隱しの萩の枝を折り之れを著として卦を布き、『今八卦』は二軒茶屋の串を以て筮竹とした先例があるので、この『今いま八卦』は、笹瀬の擊柝を卦木とし鰻の串を筮竹に代へ大正亭で新らしく八卦を布いて見たと書いてゐます。

一 この『今いま八卦』は、『今八卦』から十一年後の天明四年（我が二四四四西曆一七八四）の開板で、板元書肆は『丁左屋榮三』など、わざと洒落に書いてゐます。『色八卦』が寶曆に、『今八卦』が安永に、この『今いま八卦』が天明に生れて、いづれも其の時代々の浪花の所々に散在した遊里を寫生してゐるところにこの三種の姉妹篇が、いつまでも光彩を放つて、我が浪速情調を知るべき好資料として、永く傳はるでせう。

一 殊に此の『今いま八卦』は、開板當時の印刷部数が非常に僅少であつたものと見え、濱松歌國は其の『懋陽奇觀』の中に、『今いま八卦』は珍書であつて、自分もまだ見たことがない、との意味を書いてゐます。歿後既に壹百年の歌國が、その生前に於て、夙に稀籍として珍重されてゐた此の『今いま八卦』が、我が浪速叢書刊行會相談役三宅吉之助氏の書架の中に愛藏されてゐたのは真に喜ばしいことです。

一 原本は二十一丁。天地六寸五分。左右四寸四分。

今いま八卦序

故糸山翁浪を花街のしつ所を外して巻六卦よ
 も、妙きふしひ婦子傳甲新まきりし一強く
 今、卦を著し世より時うつりて情のたまはるを
 かく宜なりと本字正手が城を傾ぐの文字も
 づし情を致しとちう高き處をさるといひ
 今ハ東都廓言堂主の美益五全筆は考謁史
 今、のこんと又今ハ卦よる爻卦でるを世游の
 數、柁を卦木とて、銀又鯉の串を以玉竹と

今いま八卦

うらて大正有字ありてあるを考へ、後世の事を
考へし、後世の事を考へし、
考へし、今今八卦と号し、
考へし、今今八卦と号し、
考へし、今今八卦と号し、

体四新後字

放湯新本



陰陽師不知
身上謾搜世
間千萬寔





浪花花街今今八卦

浪速 放蕩 軒撰

桔梗卦

これハ嶋の内 坂町の卦也萬花麗を好み花やかなることは今八卦時代もかわることハなければと兎角後世になるほど人氣だんく賢しくなり娼妓も哥妓も勤めにくひことになりしとハ色八卦時代に黒齒して又頃日入齒の鐵漿つけした弦妓のはなせし也色八卦時代ハ俳優にもせよ妓邑の蕩子にもせよ色といふものあれバかくさぬ倡伎ほど繁昌せしが今八卦の時分にハ倡伎の私夫を知りながら面白がるハ粹だをれじやとやらいふて二十年まへ田客へ擬作ふた所を地の客へもつてゆくといひしも今ハ其今八卦を眞の粹も草の粹もよく空んじて又これでハとんとゆかず先初二二座ハ一向人望なくそれならバとてふるなど、いふことハ當流にハなしたまへ外ハ大事の客にさす人と見れば據なく斷いふこともあれどこれも大概なことならバ知らぬふりにてつとめ情客とさけくらべまづよき方へしたがふが當世と次第に法律のみだれしも兎角賣をまきちらす豪客がすくなきゆへなりたとへ初め素

氣なふあしらふても二會三會とかへりのある客に徐々艶話を流しかの今八卦時代のべたせりふをしかけ文帳くり出てまきりにニひづくしの艶書をおくりそれもそれ／＼の客の精心をのみこみいろ／＼のこのむ處をあてがふハ此邑の妓ほど賢きハなし少し客にもりが来て約日の一ツ二ツ内證のたすけにもなる所でわたしやはじめ二三度あふたときハこちの春野さんがアノナンテラあの客ハ實らしいほどにつきこんでせりふつけて見ひといふてなり私も其氣でつきあふて居たけれどいつの間やらツイ眞實になり今でハ最初いふたことがおかしいやらアノナンテラ罰ハあたりハせぬかいなエ、にくとナンテラづくして一ツつめる一言に罪も報も後の世もわすれはて、おもしろふなり夜が晝やら晝が夜やら知れぬやうになり一夜ゆかねば氣もすまずアノ初ハだます氣であつたといふことをかくさすいふたのが面白ひとおかしい所に眞眞がついて全身の覆るをもいとわす通ふ所でわたしや逢たひハあひたいけれどそれでハ御内の首尾も氣にかゝるハテ幾日あわんとて心にかわることハなしチト内にも居なさつて折にハまた灸もすへてとかくわづらわぬやうにしてをくれと親族の老父と取ちがへそふな諫言にあひ文の宛名も旦那様と記し我名もゑんじやの柳しやのと實名をかき親の素性を問へば折があらふでつきのばしこ、でハまばらく約日をうらす請寄もいわず折々にハかしも來り又ハ坂町の團魚肆うらや劇場後面ハ内證でつれてゆき實に私夫といふ所を見せるにのりが來て夢中になる所で終にハどつこひさといわすことじや何商ひも今どきハ望姓が大事じやと約日簿のをくに相庭つけの書であつた倡伎のはなせしもおかしさりながらこれらハ中品より以下の

初心客花美に遊ぶことハ此邑ならでハ一向出來ぬことなり青樓も日にまし花美になりゆけども客ハたん／＼老實色八卦時代のごとき名の高き飄客ハ今でハゆびを折るにたらぬなりこれを以て見るときハ戎橋邊の樓に追つけ長町の傳舎か西口の骨董肆見るやうに軒のうへにながひ髻の招牌を出すとの噂判官株をわきへとられぬ要心なるべし唱妓も次第におとろへて齒列の謝物なしに倡伎と同商賣箱のいらぬ客でなければ埒あかぬと兎角さもしひせりふがついてまわれバ自然とあそびにめいるところの出來たも秋風客の多きゆへなるべしとかく時代々々で月花餘情に送迎必ず駕にのるといひしも今ハ適駕にのり時曲も長ふハ用ひず色八けに金毘羅さまが長町の毘沙門へかわりしといひしも今でハまたこんひらさまハ月々にかゝさすてうちに二ツ紋をつけびしやもんさまハ見むきもせず妙見参りいひ立て日柄を賣親の内ハ訪尋にゆくと妓に孝心の出來たも世智賢ゆへ也客の利口すぎるハ今にかわらずアノ茶屋ハ下物の出しかたのよひのドコの茶屋ハ鉢敷をすくなふ出すが面白ひと不好味物喰て價の貴を悦ぶを見てハ又衰微といはさら／＼見へぬなりすべて此卦にあたらん人ハ花麗を専らとして劇場の初日をかゝさぬやうにすべし

龍 膽 卦

蜷川 曾根崎新地の卦也色八卦時代に京の祇園町と大坂の新町を合法したやうなといひ今八卦に同格なりといひ

しも今ハかわりはて、何かなしに嶋の内と堀江をひとつにしたやうになりとかく花美をこのみつよきいかたを悦び妓の状にもさんしり、じやの文して申上のといふことを嫌ふ客多けれ、きのみまで羞明やうな天窓した妓もあすハ銀の簪一本とかわりはてる妓ほど流行此間の風がふかねバ二十兩の櫛が出来るにきのふの雨で立がねがのびたのと色々の不時いふもをかし或ハ南わきの判官またハ息男の梅田もどり此所へ来るもあり又ハ一丁目二丁目裏へハ北を見はらすをいひ立上茶と虎や饅頭で中の妓買ふ桑門もありて色々變卦のある所なり近年ハ大仁の麥食ゆきハ南の豆茶やと肩をならべ信心な妓ハ妙見参りに近いとて無理仕替とつて此所へ来るも多し惣躰ハ中比にかわるることなし

變卦中町ハ色八卦よりおとりしと今八卦にいひしにちがわずかわることなし

又こつほり町ハ蜷川の東はるかに品くんだり表屋の店のつきハ伏見の墨染にひとしくたと色一まきの所なれど折にハ夜なきのなんばうどんで酒のむ客もあると聞へし

な、村屋敷梅がハ大經寺前新屋敷茶種御殿いづれも少しづ、のかわりハあれど大躰ハ同じやうなる所也たま〜客がけふハゆるりと遊ぶといハハ外婆が心得いつも性急なゆへ御かまひも申さずけふハあた、かもので一ツあけふと客に留まばんとして何やら看とつて来てこて〜あた、め鉢に盆のふたしてもつて出サアこれであがれとふたとるを見ればあちやらに湯氣がたつたといふも悪口なるべし

鶴 菱 卦

高津新地 六万臺 尼寺前 勝まん等の卦なり高津新地ハ今八卦時代よりハだん〜寂しく今でハ空屋も多くちらほらと懸燈もあれど片店ハ茶肆やら魚肆やら富の榜もこ、でハ賣れず醫師とよびやと兼帯して居るもあり外妻ハ薄暮より門口にたつて男と女とつれ立て通れば親子兄弟の差別なしに聲を出してモシ座敷があひてござりますとよび入る、もある也又下寺町にハ色めきし茶店もありて大師廻りの老婆がア、あんどやと腰かければか、が笑ひ〜茶なりとあがりませ

釣鐘筋 以前にかわらず引たをし今八卦に在所とあれど今ハ都鄙をゑらわらず引はりだこにすること也すべて此所の妓咽喉の下に名所あり此ゆへにか近比まで東のはしの南側に(此ノ所二字抹消)の損を治す薬といふ簡板まつ薬でもなひひつ薬やの向ひにあかしもさこばて庖刀賣るたぐひなるべし

溝の側 今八卦にくさみうせしといひしが今ハ又くさみいやまし客が這入ると妓ハ門首で(此ノ所二字抹消)して這入るも見苦し去ながら陰者な人ハ出るとき向ひから見人かなひと又このんで通ふ人もあるへし

六万臺 相かわらず在所もの出入し折にハ地の客もあるべし酒ぎらひの客にハ石の鳥居の熬餅とつてくわすも道頓堀で喰ふ伏見やの茶巾より味ひまさるべし

尼寺前 今八卦時代とちがひ代口物が直に呼込所はなく外婆が門口に立ならんで調子を一だんさけてチハイくといふて呼ことなり藝妓もありて折にたてる客と見れば多く坊主か醫師也たまく伊勢搦曹耦興會に西照庵惠海庵へ藝子がゆくとまきりに鉢を繕ひ盃さしてくれらるとゆすがねへのめぬやうな哥妓がわたしや去年まで嶋の内においたとき御客おおくつていたもどりに太左衛門ばしのうへで櫛盗人にあふたと誰か問もせぬひとり咄し頭のも盗れて是非なふ爰へ出て居るといわぬ計の僮上も又うそらしく花にいたもどりの酒肉店の男と門中で相撲とるまね彼岸庚申などの此所の紋日にて尼寺へ土器なけにつれてゆく客へ此所のがこうさんなるべし

勝鬘 今八卦にいひしごとく色八卦時代より花やかなれどヤハリ門口に老婆が出てうなづくへ今にやます清水へ日参の客になじみかあるとわしや此間へあこやじやと在所ものを景清に見たて又へ京作や平三へ参會の客か膳にすわりて才婢が食もるを見て北山へきつひ大雪より外知らぬ時代老父が膳がとれるとソツトぬけ出うなづくをしをに内へ這入ると婆がたばこ吸つけて此間から娘出の新造さんがあるが(此ノ所四字抹消)じやよびんかといへば送り込へ無術けれど娘出に氣味合があつてそれよんでごんせと皮につゝんだ炙物を大事そふに鴨居のうへへあけ棚のうへから煤だらけの眞鳥の中字をおろしてお作とめましやと口の内でかたるうちにかの娘出七ツ時分の淺黄縮緬にやうかん色の縞子の帯してくるを見れば成ほど一度へ娘出なれとも聲ハ二ツにわたつたやふで坂東聲かとおやしめバ客も鬘髻を墨に染たき心地して二階へグワタ／＼ばどが新造さん大事に(此ノ所五字抹消)と古風な挨拶して

て跡とひにゆく度に片手に秤をはなさぬもおかし

花 菱 卦

安治川 靈府 八軒茶や 編笠茶や 眞田山等の卦なり安治川へ成ほど船かゝりの客多く風まんに客の多少あり常任別れにへ姫小松の物語見るやうなせりふで客を悦ばせ又重ねての無事着を祈るも所がらなるべし

靈府 勿躰なくも北辰の神號をよび又へ蘘谷とも唱へ客ハ此邊の桶工の村僕梓人の作人庚申参りの下向に角丸の芝居見たを手がらそふに咄し調子のあわぬ三弦弾してまだ五年あるをまつかふ語り二階の唐紙あけて二疊敷へ這入りしなに門かあまつたらばばらして下んせ

八軒茶や 今八卦時代と餘りかわらず素人作りにして門口へ出てまねく色八卦時代には表に鮎や焼肴をつり酒肉店のやうに見せ時々には取ちがへて這入りしものもあれと今ハ廿五日に大文字あけにゆく兒童までが爰へ娼家といふことを知りて望なきものハ決して演史場より西へゆかぬ事也爰を通るものハ呼こまれるを合點か但しハ紙屑買なるべし

編笠茶や 雀鮮のかんばんむかしにかわらず替りたるハ大分奇麗なり町の出合等多し
眞田山 牛欄のやうなる所から首出して客をよぶ春は大分賑わしく泥鱈汁とつてのむ客もあり必ず穴へはまらぬ

やうにすべしクワイ〜玉造稻荷 店いあれども今いなし

蔦 菱 卦

上鹽町 野堂町 馬場前の卦也此所古しへと大にかわり今八卦時代よりだんく〜花美に成り凡浪花の粹會所となりて晝夜送り迎ひたへす一ツの色里といなれり時々にはねり物も出し堀江の仕かへ坂町のむしつきすべて此所へ來り天王寺參りに已前の知己に逢今何處にじやと問へバアイ上にと計りいふもまだ少し耻る心成べし茶やハ田樂やの婢女狹妻の宿這りもたま〜ありてまた辰らんなどのあたりよりハ東山を窓前に見はらしおもてつきハ町の隠居のやうに見せ多く懸燈を路次の内につり風雅を好む人ハ必ず此所へ來るさしきで遊んで居るに向ふに哥妓とおほしきもの何やら草を引て居るを見てさしきのけいこ大聲あけて松さんたのしみじやなといふとイ、エどふて幸さんのやうにいなわいなと答つてゆく客を見れハ多く僧形也今でハ難波新地より面白き口ぶれもありて道俗ども此所へ入込今八卦にいへる貴得も今にたへす粹をつかひ客の雅俗によつて出しかたに氣をつけ氣に入た客にハ自身さしきへ出て調子を合すこと也近年ハとんほうがへりとふ〜念佛會すべて仙人の入込所後ニハ唐音おほへねバゆかれぬやうになるべし

檜 扇 卦

難波新地の卦也近年の繁榮客いろいろの不同有て茶やハ新屋敷の宿がへ才婢の宿這入り 庖人の店出し其外家居追々増長して妓ハ馬場前の仕かへ坂町の假店其餘さまざまありて飛切の美もあり飛切の醜もあり哥妓ハ色八卦時分にかわらず野卑なれども客相應にもてなすことハ新町落の老婆哥妓が傳受せしと見へたり近年ハ吉田やといへる 樊樓出來て四季の景物を出せしがこれも何時の比やら空家となり豆茶やハ相かわらず納涼も以前よりハおとろへたれとも角力ハ此所に極れり法善寺の南の阮巷今でハ此所の出口に成りて晝夜の往來に犬糞をかたよせ夜ハ影屏の上に燈籠を出して國性爺の樓門をあざむき内街の息男奚童上りすべて此所を手習ふ初めにして葬禮のもどり劇場のもどり片下の櫻飯いひ立て一切り買ふもあり夏ハ表をあけて提燈をつりまんざいと松づくしの大黒舞て飲あかす客もありて種々變交する卦なり

新屋敷 今八卦時代までハ餘ほど賑やかなりしが今ハ甚ださびれて三弦の音もたへ〜になりて懸燈もちら〜となり爰の豆腐行彼の魚戸へでも呼にさへやれば來ること也ねがわくハ今少し繁昌させたし爰もながれの嶋の内しや

髭剃 妓ハなんば新地のをち 新やしきのはね出され郡内嶋のはけた衣裝ハかまわんが質鼈の筭を四五本さす

にほこまれり又素人出といふハ青梅嶋絲じまにて美醜を知らず呼屋へ來ると竈處に耻しそふにして居ること也
時々ハ本の素人ありて夜計りで晝ハ出ぬといふやうな代口物も有はずすからす爰も仙人の入込所にして思ひ
もよらぬ客ありてなんぞ珍らしひものハ出ぬかととひに來ればハイ此間京の祇園町出じやといふのがござります
ソレよかろと呼にやれハ京ハ京であらふが細手か藪の下の代口物おちかさなんともふて呼にくしたと懐か
ら丸鏡出すもおかし

寶 結 卦

堀江の卦也此卦にあたらん人朝より賑ハし表より裏多くして床柱に極印のあともあり色八卦時代にかわらず哥妓
ハよし去ながら賤しみありて箱に本入れる哥妓多くとかく時言をつかひ客をこなすあら木と市ノ側より外劇場
ハなきもの、やうに心得薄情な色事をはやらし多く借死を仕出し幫間ハまきりに粹がり馬手な客ハ座敷で喰ら
し近比ハさる一かどの豪客此所で幫間して居給ひしが其後北の新地へとやら其あとハ知らず團魚豚汁を流行し
年忘れさらへ講券もふ等たへすかねつけ袖つめ名がへ等積物をして顔見せをあざむき哥びらきも江南西廓にお
とらず去ながら庖人のある茶やハすくなく多く魚店ですまし大概な所ハ外婆と婢女でしまひ客が來るとまきり
に追従いふてさしきへ通しすぐにけいこさん誰にしやうと呼もの魚戸へ一所に走り先最初ハ壹匁五分の硯ぶ

た煎ぬきの鶏卵と鮑貝よりのみかけ吸物も魚戸からもつて來る筈暫する内哥妓來ると此邑のくせとして客次第
で勤かたがふこと也一けん客ならバ挨拶もなしに上座になをりおもん様夜前ハと外婆へ挨拶酒一ツのんで六
ツかしそふに三弦つぎ調子あわすに半時ほど懸りて藝子同士尻目づかひして露のてふ一ツを義理か役かのやうニ
弾と客ハうろたへどふても長哥のことしやと知りがほけいこも漸と片頬に笑をふくみてモウ客の性根を知りあ
とハ藝妓同士の咄おつぎさんおまへ朔日ハ向ひへかヘナンノイナ又例のいへどもでなまだ知れんわいな夫ハそふ
とコチのもと様も今のがな豆腐ヤの地震で植木やの大風じやわいなと玉がかへつて氣がもめるといふをもつてま
わつての隠語其間に客ハか、を相手に朋友の悪口遊びハ二ツにわかつて座が知られるをか、がチトなんぞわつさ
り弾んかといへバ十二月の手まり哥かのたのふしで盃まわすといふやうにとかく客を見こなしチト粹がつた客
の椽ばなへ出て投つけるやうな青葉でもうたふて居る客ハめつたに調子づがし妓も其通りでまだな客ハ圍中で見
せつけ官位でもあるやうな顔して獨歩行すれとも跡から線香もつて行にほこまれりとかく此邑ハ新町と反對で新
町で羽織の紐を胸の上でむすぶぐわんあれバ爰のぐわんハ帶の下でチヨいとむすひ新町を好客ハ堀江を嫌ひ堀江
を好客ハ新町をきらふさもあるべし大内出女釋出藝婦出帽子出などいふもの折々ハありて珍しがらす一座二座の
差別あつて美醜をわかづ其餘六町目ハ船と陸とを兼帶し柳小路ハ濱と岡とをつとむ暫くこれを論ぜす又壹町目あ
たりに内證といふものありこれハ新町其外にもあれど此所ハ又格別にわけ立てある也コソともいひテコともいひ

大跡ハ髭剃位の代口物十日拂にすればあたひ賤し吝き人ハ價の賤ひを聞て爰へ來り顔見てびつくりこれならバヤ
すひ筈じやと觀念し夫にこりてとんとゆかすに居ても又(此ノ所四字抹消)がつまると直のやすひにめんじて年に一
二度ほどづゝ來る客も有これを號て密賣姪初飽希來客といふ(此ノ所四字抹消)のせわしき妓ハつゝしんで遠ざかる
べし

桐 臺 卦

新町の卦也誠に花街の起原太夫の八文字貸借の法令限りの太鼓送迎の箱提燈了鬘の返辭行成の煙草入廓の方言
往古にかわらず何となく穩にして古風を亂さず成ほど幼女より育上門より門ンまでを二世界のやうにおもひ他
を知らず廓より外里へ出るハあれど外里より來るハ希なれば自然と悪交といふことなく皆客交なれど近比ハ其客
がみなさまんくの外里の粹をつかふゆへ流言をいふやうにハなりたれども今に古風のこりて田舎客ほど大事
につとめ内證たのむも客へハじきにいわず南で旦那様など、かく文もこゝでハあなた様など、のどやかに書折に
ハ大和詞や古哥をいれて戀の文つくしを其まゝに書直諒な妓もありて廓といふ所ハきつとあれどかわりたるハ鹿
州のみせつきに金燈籠を出し牽頭も小勾欄の物まねを仕出し太夫も客によつてハ茶碗で酒のみ天神もうちかけ
着ながら中藤の店へ立よりまた備州屋の何某にならふて茶の湯ハ聞へたが亂舞をならひ客へのはなしにもわたし

や夕べ櫻川の網のだんで手を怪我したとのとわす語りも白拍子のまねびかも知らねども少しいやみの方去ながら
どふなますこふなますの詞ハ今にやますこれハもと酔吸の三教より出たり孔子ハ酸し釋迦ハ甘し老子ハ苦しとい
へども孔子の酸きものを酸し(と)の給ひしこそ格物致知のをしへにして五常をばづれす諄らわざる所也巧言令色
を以てせずよく五常を守るを粹といへり純粹と熟して物のきつすいなるをいふ倡伎哥妓牽頭外婆才婢其外それ
くの諸わけをして心をくばる是仁也紋日約日を變せずこれ義也たとへ遊びに長し酒に過しても朋友をも敬ひ一
座のものをさけしますこれ禮也樂むへき時ハ樂しみつとむべき時ハ務無益の貨實をついやさずこれ智也情妓の
外心をよせず悪きせりふをせず是信也此五ツに全きもの孔子の所謂酸也廓ハ粹の集る所なれば酸といふ義をとり
て論といふことじやと去ル博識のいひしぞかし又或人のいふ今世間の風俗を見るに白選つかわすして粹とよばる
ゝあり白選つかふて非雅といわるゝあり粹と呼れて白選つかわぬよりハ寧非雅といわれて貨實つかふ身になりた
しとは彼誰やらが粹ならぬこそおのこハよけれと吉田やでの戲書も宜也江南ハ遊びを先として色を後にし西廓
ハ色を先として遊びを後にすれハ(此ノ所三字抹消)味ハ廓にまさるハなし凡花街に遊ぶ人先廓より入て而じて外
里に至るべし廓を知らずして外里に遊ぶハ文學をこのんで經書を知らず謠をうたふて拍子を知らざるかごとし江
戸長崎をうらやみしハむかしのことある田舎の粹が大坂の太夫に大坂の衣裝を着せ大坂のはりをもたせて大坂の
揚やで遊ぶほど面白きはなしといへり揚やも茶やも日にまし花美をつくし近ごろは新揚やも出來て庭の物すきざ

しきのかまへ自然と物さびたる躰中々外にて及ばぬことなり其外鹿州端女郎まで夫々の法式を亂さずすべて此篇(篇)は色今兩部にあらわせるにあまりかわらずよつてまづこれにて筆をとめ諸君子の批點をまつのみ

浪花花街之異名

左にあらわすハ浪花諸遊里のかへ名たゞ世にいひならわせるのみ雅俗を論ぜずあらましを記す此餘さまぐありといへども其妓邑のみにして世にいひならわさざるは畧之猶くわしくは其邑々の粹に口授すべし

色道の占は前書にゆまりて省之

新 町 廓中
西廓
ニシ
坂 町 坂亭 坂丁
トライチ

嶋の内 陽臺 江南 南陽
南州 ミナミ
向側 坂町よりの通稱
難波新地
在所 ナンチ チナン

曾根崎新地

北里 北州
鉢ノ木 サクラムメダ
三橋ニヨルカ

高津新地

ホリトメ 釣鐘筋ハ
かねすじトモゴンノトモ

尼 寺 前 三みせん塚
寺内ニ在之故

六 万 臺 追考
勝 鬘

安 治 川 羅生門

靈 府 袋谷

馬 場 前 鹽丁
餘外有べし
上 鹽 町 追考

髭 刺 ヲトガイ ヒゲ
關羽反言乎

新 屋 敷
八 軒 茶 屋 追考
真 田 山

堀 江 江州 屈江
穿江 リツボ
都鳥

煙華湯筆

今いま八卦

此外梅か枝 こつほり 菜種などの異名を以て通稱とするゆへ別名なし

天明四辰年三月穀旦

二六

書肆

大酒庚申町二軒目

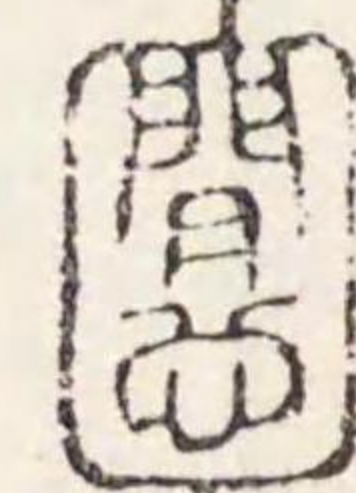
丁左屋榮三

解題

- 一 『煙華漫筆』、原本は天地五寸一分。左右三寸七分。序文三丁。本文十九丁半。後序一丁半。その内容は敍説、銜院、浴室、妓名、白刃、歌妓、絃響、琴女、仲居、女童、幫間、提拾奴、擔子、治郎、優人、供唱、戲場、機振の諸項に分つて、當時の浪花南地の妓樓情調を描破したものです。
- 一 序文の撰者は『張葛居辰』とあるが、この人の傳記もわからず。著者が何人であるかも今では知るよしもなささうです。開板の年月、并に板元もまた不明です。たゞ『嶠陽英華』より後れて出たものといふだけが本文のうちに推知されます。
- 一 この書、文章流麗、『けふしもつゐに筒井筒、居つゞけくらす夕ぐれは、誰まつむしの……』といふ一節、また『……夏は鐵眼の豆茶に暑さを忘れて扇をおとし冬は顔見世の蠣雜炊に親の目を忘れて精進をおとす……』など、巧緻精妙の域に達した文字が、到るところに見うけられ讀者の興趣を咬ります。
- 一 本叢書刊行會が、今次この書の底本としたものは、南木芳太郎氏の愛藏本。板下の文字また

艶麗、情趣に富んだ筆蹟であるのが、殊に嬉しく感ぜられます。

煙華湯筆序



雖江南大都會未盡倡家遊戲

之態於簡篇者有年且喜新造

禿郎之屬流行之時佳言

黃比雅衛聲之最墨者寡氣

煙華漫筆

書話見自呼淨之樣心謂諸躬
 而已矣嵐三郎市彦十五郎生
 而三郎之遺愛存於遺于本家嚴
 不減而至今時見者生踊躍廿
 心於此言而澤尔

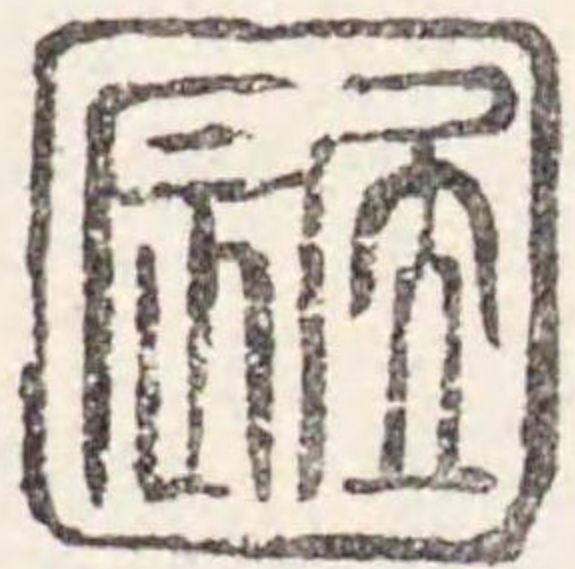
東方有僊人其名曰久米不敢終
 術隱跡於風狀為一妓樓之主
 丸如樓麻之徒也帳中有書得
 之久米之屋中矣猶得魯論於
 孔氏壁中不復奇姪哉雖然當

世^{カミ}貝^{バイ}多^タ文^{ブン}而^ニ不^ズ能^ズ讀^ム故^ニ無^ク益^ニ公^ト
 諸^{コト}島^{トウ}内^{ダイ}乃^ニ譯^{マタ}國^{コク}字^ジ以^テ告^グ同^{トウ}士^シ其^ニ
 餘^{ヨリ}言^{ゲン}盡^{ツク}唐^{トウ}人^{ニン}懷^フ古^コ中^{チュウ}淨^{ジヨウ}後^ゴ名^{メイ}
 郎^{ロウ}武^ブ道^{ドウ}場^{バウ}都^ト獨^{ドク}十^{ジュウ}藏^{サウ}一^{イチ}時^ジ大^{ダイ}當^{トウ}
 代^{ダイ}官^{カン}島^{シマ}十^{ジュウ}年^{ネン}長^{チヤウ}嘯^{シヤウ}出^{シュツ}揚^{ヤウ}是^シ懷^フ
 古^コ中^{チュウ}不^ズ子^シ之^ノ子^シ之^ノ子^シ之^ノ不^ズ子^シ混^{コン}為^{メイ}
 之^ノ句^ク不^ズ子^シ之^ノ子^シ之^ノ子^シ之^ノ不^ズ子^シ混^{コン}為^{メイ}

一^{イツ}徒^ト不^ズ可^ク必^ズ泥^ニ矣^ヤ
 野^ノ外^{ガイ}之^ノ千^{セン}日^{ジツ}是^シ方^ハ讚^{サン}五^ゴ之^ノ帳^{テイ}中^{チュウ}語^ゴ嘗^{シヤウ}
 聽^{キク}淨^{ジヨウ}黨^{トウ}之^ノ以^テ醫^イ者^{シャ}之^ノ音^{オン}松^{ソウ}吉^{キチ}三^{サン}
 未^イ聽^{キカ}娼^{シヤウ}女^{ニョ}之^ノ似^ニ浮^フ屠^ト者^{シャ}如^ゴ松^{ソウ}可^ク古^コ
 見^ミ殺^{サツ}風^{フウ}余^ヨ戒^イ曰^{イハク}為^{ナリ}亮^{リヤウ}郎^{ロウ}小^コ女^メ郎^{ロウ}
 影^{カゲ}裁^{サイ}

新兵衛子之輩而能買雪花菜
 莫必養娼家而奏胡瑟詩曰螟
 蛉有子螺贏負之此謂也

張葛居辰撰



敘

說

なには津にさくや此花と詠したる神かぜかや高津の宮の梅の匂ひのいともかしこくのほりて見れへのことの葉より四の民富さるへなしおのがさまくいとなむ中にかへらやの煙今もたえす鳴の内むべも賑へり道頓堀とへこの頃や人のいひはじめけんかし遙にきく女の物あらふはきのまろきを見て久米仙人のつうをうしなひし地即こ也とたしかなる書に見えたり難波堀江にとなりてその流いさきよく賑はしき地也しにかの仙人墮して目くるめき腰のいたみたえかたし腰ひやうたんをさくれはくだけてなしいか、せんとた、泣になくこの女宿縁にてや有けんやうく瓢酒をもとめ来て仙にあたふうどんの粉をといへはしり来て又あたふ仙夢のさめたるかことしあたりを見れへ美しく粧たる女いくたりとなく出てテ、コハワシヤイヤイナといふてさへぎまとふた、はじめの女のみよりて介抱す幽にきけハスイタヲトコヤスカヌツマあるハムテニセマリシカヅカツノというくの物の音仙か耳をつらぬく忽つうりきうせはて、かの女に向ふ爰はいかなる佛のみくにそ管絃の聲殊勝に數多のほさつ來迎あることわれらこときの卑仙にハもつたいなしと紅涙木の葉の袖をひたしさなから秋の紅葉の物いふかことし女俄にはらをたて菩薩々々とわしや舞婢でハごんせぬとたつてゆかんとす仙なくくよびもどし志からハなんじやわしや中居といふ物てごんすといへハ仙人色里とさとり是ハならぬと虚空をにらんで上らんとすれど三尺とハゆ

かすたびく地におつることはねなき鳥のごとしいかにしても仕廻つかねかの女を深くたのみやうく手をひかれて家に行て見れはかつて雲くさき香もなくきん出し花の露のほひのみしてもちろん木のはやうの物きたるものひとりもなし宮殿らうかく珍膳美味アイ、く、の聲庖人のいそかし菩薩の來迎或ハ還御ヨウタイデタヘサバへの聲いやはや繁多めにも詞にもつくされす鶯のみふるひしたるやうにて肴やのかよひのかけてある下に疊のひけをむしりてゐたり亭主出あひいかにといへと頻にはつかしく只うつむいてゐるを亭主あらくくふうして俄にたん尺のやうなる物をこしらへ仙人の新ぞうといふ差紙にてんぢく横町出とそへ書して出せこれハかほちやよりもめづらしいとて所々の迎門前に市をなし聞傳へし客人の入來に座敷もつまれハ隣家をかたらひ猶だんくに繁昌すはてハ大芝のをかまへそこにも見せ夜ハ内にて勤させそのいそかしさ毎日大晦日のごとし世界ハ又ひろくてせまく三年ほどがうちに都鄙遠境残らす見まひけるにや少さひしくこれか評判のよひうちにと勤をやめさせさかやきをそらせ秋田屋久米右衛門と名を改む今の秋田これなりかのあきた大福人となり其後ひとへにこれが影也とて彼女の名をおせんと改め久米右衛門にめあはすおせん故ありてのちに貝塚屋と改め今の貝塚の祖中居の元祖と今以稱せりかのうとんの粉をあたへしハ今の寂稱庵にて絶すそは切にて諸人のおとかひをゆるくすいかゞしたりけん山のいものやうなる杖兩家のうちにあるべきに寂稱か家實とて今にあり是ハうどんのこのあたひに俄のことなれハやりしと縁起にハあり覺束なし見せたりし芝居今ハかふきといふことを仕覺て七八軒ます

く繁昌す以來見せ物まぼるといふハ皆この餘風也是又別して道頓堀のきほなり仙人のつう力残りけるにや他に此類出來たれと年中太鼓を打つくるハまれ也昔のことをいへハかびくさくまた傳者の誤も少からし唯賑しきハ南廓の粧ひ西北すて難波の三廓といへとこれに過たる遊地ハなしちかき程の人ハめに見遠き境の人はをのづからきもつたへぬらんかし是に屬する所々東に上鹽街高津新地南に坂街難波新地西に新屋鋪難波堀江とう也猶あるべくその尊卑まちく也其中央南廓と稱する所にして四季にまほまぬ花松の位にもすきたりもつとも京をもはぢすといふへし誰かゆきてのまざらぬうたハざらぬ

街

院

凡軒數疇陽英華二見へたり

大むかしハそつと志たることなりしに彼久米右衛門よりこのかた今數百軒まな板すり鉢の音に晝夜のわかちなく
貴もいやしきもこゝに入來たる難波の繁昌いふ斗なしあるか中にふるまひ茶屋といふありのら茶屋といふある
よしわれこれを詳にせずされと一かいに錢さへつかへをもしろいといふ斗にてもあらざるか家造ひろくて鈍
なる有せばくてなれたる有きへめてきへめかたしかねてもうけたる興よりハ即興をノミといふうちこいことお
かしいこと喜怒哀樂こゝにおゐて始るいかにといへハ皆氣違にて皆本性也愚鈍かとおもへハ皆智慧あり何のこと
ぞや酒ゆへかとおもへハ下戸とてもゆだんならず畢竟これハばけ物ハ誰もこはけれハさもあるへし世界無上の藝
すくしを見るゆへに又見せつたへテいは、酒のむと刀を抜て追ふ人ありこゝに集る人皆それと思ふて遊ぶかよい
必たまゝ人にあることてハないとおしへし人あり尤とやいはんわけなしとやいはんのめやうたへやと出かけて
一寸さきハ闇の夜にあそて投られた誰ハ心中したけなとするかせぬかてこそあれ皆わか事をいふてなくさむこ
そおろかなれともいはんか身をあしくはたす人も四ツばひにはふて酒ものまねバ頭であるかぬこととられたり油
斷をすかせぬかのさかひにてたの志みもくるしみもそなりなんかしさう氣をはつてハ慰にハならぬそれを
わすれうために來るといふ人の仕廻か見たしあたら光陰とハ誰もまりなから色がたますか酒がぬすむか茶屋がゑ

はすかけふも又あすもるつゞけ呑つゞけ内ハ野となれ山となれ跡で女郎かだましたのあそこの茶屋ハわるいのと
いふ人ハまたあふな物來いといふのもそれかやくこふといふのも役なれハ程よきをこそ此里の悟道徹底大粹と
いふべしなを詳に記すもふすいの上もりと畧す

浴

室

即稱娼館 置屋といふ

から風呂をたきて業とする在名ばかりにてせぬあり日をさためていり人をまねく垢搔女茶立女といふを抱置又水
茶屋といふもあるか皆此類也數さたまりて今猶連綿たりから風呂の功能宿酒を醒し體をゆるくすくハしくハ行て
き、たるかよし

妓

名

名ヲ辨ス

或人の曰鳴原吉原新町を三廓といふ事皆人のふる所也あかれハ太夫天職などの名或三浦高尾若紫なんどもつた
いらしき名も付べきにたかゞふろや女妓女の類までか様の名を付事片腹いたしわきて金吾小太夫小三郎などいふ
男の名よりどころもあらしお一お三お七などこそ似合しき名にてよからめといふ答ふべきほどの事ならねといは
ねハ圖にのる人なれハされハかやうの名おほくハ妓家に相傳の名にしてよぶこと也又ハ三廓などの通り名にもせ

よこの里の外の家のもの、名にもせよそれに擬してよぶこともあるならひ也そのうち男めける名ハむかしふかく契りかはせる男の名をすくに付しこともあらんか兵衛式部庄太夫小太夫小三郎等也むかしの官女に小兵衛左京女小左衛門備中守女其外大馬小馬小奎等有枕草子紫式部か日記にも見ゆこれらの例ならんか又小竹小吟小吉等ハ大様阿の字を付來るにおなしからんか三國の小女郎ちと小の字にわけもあるかその外名所古跡の名源氏の卷名古哥の艶詞等ハみなむかし客よりほめて異名のやうに付たるを今ハわけなしに成たるならん茶立女風情とてつとめの情にかへることなく三廓の太夫も女御更衣のはてにもあらす花といへハよし野月といへハさらしな女郎といへハ三廓に限るやうなれハそれに擬して付るに難ハあらし内證にてハ童ラサナキよりのほんの名もあるらんにといへハ大わらひに成て又一盃のとくになりぬ

白

双

謂嫖子 茶立 燗陽英華
垢搔 妓家粧房篇等可併看

白刃の名誠に白刃のことしよくまもれハよくうつかりとすれハその身を害するのみならず人にまで難儀をかくることあてもなき借錢をして人を倒す理り眼前なりよつてあらハの名ありはぐるをつけざるばかりを白はと心得たるハ非也その名を顯にして勤るゆへ是をうつかりとする人にとがありて白刃にとがなしたとへハ人をきる刀にとがハなくて人をころせばその人の罪科のがれかたき道理也随分ぶんけん相應に道具すきハして鏢とめの心得肝要

なり又あかき茶立みな風呂屋の下仕也いつの頃よりか混じてひとつとなる今ハ白刃ハなくてみな風呂女と見えたり歎くべし風俗少つ、よりどころハあれと大やう婆共見へす娘とも見えすてかけとも見えす格外のものにしていづくをいつくとも云かたし袂に灰を入るのも起請誓紙の爪きるの髪のとふも時のひやうし逢ものくも皆まことたまされまいとするゆへに皆たまされて此方のことハいはすにいひなれし勤のものに誠なしといふハ世上の道具おとし皆このほうのわるいのならん相對死も有ならひ愛染さまや妙見にたつねて見てもある、こと男ハ女房持したいと心得し人のいひなしならん是非なし

歌

妓

并舞子 碁盤人形

抑是ハ穢の前司か娘也といふやうな顔をして出るもの大やう十一二よりして甘ばかりまでをいふまた人にま見へざるを詮とす甚賞美してわりなくいへハこれを立身のはじめとす又一種ありさもあらぬさまにて大かいにいへハ寢席をす、むる有これハ決して容色もよからず藝もまたさら也うつらくと更てさへと云より雲井に見ゆる山ア、櫻とうたふハよき中也俗に呼て色ありといふ三絃ハすへて盲人におとるゆへハ俗耳をよろこばさんとて撥かす等きハめて多くうたひかたもまた是に准す盲人にまさるへきやうもなく勝たるハ結局すさまじ大かたやかて白刃に受領す評曰うつくしうてよく弾くハ梅か香を櫻の花にとやいふべしとぞさもあるべし

絃ホウ

瞽シ 琴三絃鼓弓尺八

これハかの里に備りたるものハあらず大盡シか誘引すれハ座に出るといふか掟也所謂勾當イハユルコウトウシ至當某市城某彌某政
なと也檢校ハすこし趣意ハはれり誠に一ふしハ捨かたきものにて過しこと今のこと人のうへをも身のことをも絲
にのせてうたふめづらしき物といふべし宵ヨイのくぜつに更行頃三線とうしハさらに琴鼓弓ちらべあひたる尺八の音
色えもいはずめでたしまた酒ものめす座もあめりたる夕ア只ひとり振廻てうしにハあらてねちくさきことはり上
てうたひ出たるに人なれかほに白人やうのものよからぬ手ひとつふたつひき出たる興あり評曰五月雨サミダレの物さひし
きに時鳥ホトトギスの二聲ハかり鳴て過る心地とやいふへきやあらず

琴コト

女ヒメ

目あいたるもよきもあり寢席シニセキをかたくゆるさずゆるさして益なき歟

仲ナカ

居イ

婢使也 めしたきとの各別也

年齢ネレイ不同あり皆おせんか流にして古來ハすへて緋ベニのまへだれを着すもつとも容色のものもあれハ遊君へのゑんり

よにて着すと見えたり當時ハ色合もさたまらず中比取わけ紐ヒモに結構をつくす機山先生カ所爲也今ハ又結句いやら
しなともいふか是ハ大盡のよく氣に入また勝手向萬事奔走ホソツし心てをつくすゆへに仲居ナカの號ありおほく色事といひ
てよからぬことをして親かたを替尻シツのすはらぬを上品とす道によるつとめかた常にこと也もつともよしといふべ
したまかに勤るを埒あかすとさけしむ寒暑カンショをいはず起番オキバンといふこと大役也此内に無隅ムクのつとめかた有心せまくて
ハ成かたし見るを見まねに色事も色にて實ホツならずかたちもはでにてえんならずされと風情ハにるものもなくいさ
きよし色事をいはゞ安倍の保名の見通しか志のだのくすのはの色に迷マヨひたるかことしといひ傳ふさもあらんかし

女メ

童メロ

俣娘ヒメぶん

仲居ナカのまへかたなるものあり又娘ぶんといふあり此うちにて其器量キリヤウあるべきハ藝をたしなみ手ならひなとす或は
妓女キヤウとなり又白刃オクシとなる其仕立まちくもといへとも大かたまつ豆腐トウフとてこい八百屋ハはしれなと舊記のことし
中に寒聲カンコエをつかふとて鶏トリよりはやく起出てさむいに障子シヨジをし明て三絃をたゝくといふか始也機山カ曰寒聲カンコエでハな
い四季とく起てこれをつとむるいとけなきものハ聲のてうし揃スハすゆへにかんばつてきかれずこれをおつとませ
あふやうに情ナリ出せハよくなる我らか銀つかふやうにおしますに情ナリ出して聲もつかへハはやく藝もあがるにと申さ
れし機山カ自讀可ならんかよつてかん聲をつかふといふだんくかくかんなんをして姉女郎と白髪シラガになるまでよ

ばれて勤るゝむねんとやいはん又はつち坊主となるもいぢらし小女の風情評して日女の夕立にあひて桔梗の帷子
ハま、よ此加賀笠ハぬらさじと取まかなふ手もとにてわけもなくその體あハれ也と

幫タイコ

閑モチ

無分別の仲人也と又たいこもちの名目のこと舊記に見えたれハあるさず畢究茶亭か、ハ肝煎にて濟ぬ所をかさ高
に取もつ役にて無評のもの也されと名物のひとつにて棄捨する物にあはらずすでに筒井山城數年の功莫太なりと
て従五位下に叙すその外名高きも多し尤當所の規模といふべし大やうかたち大盡にて強欲のものよく酒をのむ
あり呑ぬあり龜服なる有文才ある有おほくハ一文不通にて辯舌いつれも立派なれどた、口とく、囀ておどりさハ
ぎこハいろ又役者のあかたをす折にふれての興筆につくしがたしわけもなきものといふ人あり機山ハかならず
ばらくもなくハかなハ堪忍のならぬことも大盡かいハよくこらへ勇氣あるにいたりといへり

提マ

拾ハ

奴シ

白刃野郎及藝子等の従者をいふ

大やう新町の傘持にして大役を兼ね壯年なる有老たる有いづれも其體笑止也えてハ歷々もあるよしなれど先冬ハ
柑子革の足袋を太股迄はきふるしき包をいだく夏ハ團なと手まさくりて供とも見えす手代とも見えす顔うちまも

らるよぶ人よりのものらと思はるゝことせつきに軍書よむてゐる人のごとし尤風呂敷包をつゝみといふ方言也

擔カ

子ゴ

此所の名物きはめて下手なり此地の遊君隣家といへとも歩行をゆるさすきほなるやきうくつなるやよつてこれか
もうけ也また客を送るにいたりてハはいくの聲ふけて生ゑひの伽となりちやうちんのぶらつきかけんいさまし
く見所有晝夜をわかす晝をいとハ寒天またさら也機山先生哀憐の餘りぬぎて綿入羽織をゆるす其謂にて今も冬
ハ羽織をきてかく者多しおほけなくも寒夜の御衣ともいふへき機山ハ仁心也されハ冬はかり是を着す定法也又駕
のくさりハ家々の口傳あり三百度のれハ此秘訣をゆるすとんややすき程の事ならんかし

冶ヤ

郎ラウ

これまた當津第一の名産にしてなつむ人多し無理とハいはれずたゞし數種あり戲臺子と稱するもの大やうお姫さ
ま役まで也尤名たかき人おほし其餘ハ物數寄しだいにて年齢六七十又八旬の老翁も額に紫冠をいたゞき二ハの
風俗をうつす奇妙とやいはむ紫冠なきものを陰兒とやいふかわれ見るにとふやら愁をもようし是を嫌ふこと哥舞
妓芝居をたに見す最も誠の野夫といふべし又あまりに好て恐るゝや志らずよつて詳にせハ人にとふもうるさし野

白の情シヤウいづれも可也といふことハたしかにき、置ぬ

優ヤウ

人シヤ

實役有敵ジツヤク カンキヤク親父花車女形まく引馬の跡足道外各々其志な別也志かれ共一生拍子木を首にかけてくらす有よう投られたと譽らるゝ有毎日ころされ毎日蘇生イキカエルすいやはや面白き渡世といふべし志かも酒筵ツラナリに列す大様大鼓もちのごとしといふわれ又志らす面白きはなしなどありててうほうな物といふ人もあれと志らざるハ志らざるとせよと志はらく淺學を故語に諷フす又人形扱ツカヒといふ有是また甚尊タツトイサシキ卑ありて一口にハいはれす世に志る所也同しく酒筵に列す

に列す

附り取わけ此人々の中にけんをたしなむ拳相撲など、いひて勝負をいどむ人の胸中をさつしはれなる勝負をたど一手に決す見通したりとも及ふまじきことならんかし上手のハ座もやかましからすしておかしこれにならひてする人おほし志らぬわれらこときの田舎人ハ口論かとおどろくばかりさハかし勝負を見て酒のまむにハいとやすきしハさまもありなむされど唐本のはやるうちハれいのからすきとやらむにて猶やかましきわさにこそ

供ジヤウ

唱ナリ

并阮咸サミセン

淨るりのらんまやうハいふにもをよはし竹本を西といひ豊竹を東といふ大様一向宗のお裏表のごとし兩家を首領

として國太夫ぶし多く心中のたて物也半太夫さいもん是につゞくいろく流々かそへ盡しかたし兩家今猶繁榮シツケサカヘルなれハ音曲全盛の時節といふべし面白き事すく人にをよんでハ飲食を忘れ寒暑を志のき終日芝居に詰かけ涙片手に世のうき事をわするゝならぬことじやといへハ傍なる人なる事志やといふ是も東西をわかつ仲間と見えたり又三絃ハ鶴澤の何かし此道に長じ大かた此門下たり樓にまねけハ某太夫といへとも酒筵に列す尤ひいきひきにて西をこのめハにし東をすけハ決て西をかたらせず甚逸興イツクウなり色道の潤色シユンといふべし

戲シバ

場イ

哥舞妓 淨るり

日本三ヶ津のうち此地を第一とす最モツトモさうもあるべきか由來等舊記に見え又前にも見えあまねく人の知ところなれハ記シルズにをよハす見せ物芝居ハいふもさら也哥ぶき淨るりとも近來繁昌ヘシヨウして藝の代りめ毎に金銀米錢引まく挑灯酒肴に至るまで狹き木戸口に山のことく積かさね太夫元ひいきの役者にこれを投して賀し殊更けしからぬハ大様外題をかきて大のほり數百本をたつたとへハ端五ウシゴの嘉儀ケイを此所にて不残うけ込かとあやまたる數町の間に充滿しだし吹貫の結構田舎人の眼をとぼし大坂もの、足をと、むへんほんと風になひき始つたくハの聲さなからつかみ取もあるやうに思へる或ハ何某仲間某組と大文字に書て是をやりて互にこれよしかれよしといどみあらそふ誠に繁花いふばかりなく氣味よし中にも他に異なるは冬霜月めづらしき役者諸方手配テバキすみて顔見せといふこと何方

にても此佛ヲモリガのあるとなれと一口にいはれず長口上三番さう座付も始りよいよ名イ人さまくそのほかほめ詞に花をかざりよるをひると数のちやうちん進物打ておけちやんく誰か初しやらんサシビ棧敷も落る斗にどよみわたるも藝はじまり三四更にいたれ人々いつとなく静りすいた者ばかりわめく聲わけも志れぬ藝まつたく納りたいてをうての御評判々々の聲に人々まつくろにくすほりたる顔して出あくる日一日やくにたぬもおかしくそれに毎ばんくゆく人もあるよしかう上根にてこそ千年もいきさうなものとおもへり三十にやつとたらずに志んきよ吐血勘當病トケツカシトクヤマヒにて或はさまよひ首尾ようて千日とて芝居ちかき所へ貌見せせらるゝせせての本望となまめかしく口おしき

機カラ

振クラ 手妻テツメ

竹田近江伊藤出羽よりして龜屋豊後默談モクタンに此比のものにして手つまいへむかしより羽州細工といへ江州アヅミと第一小兒の悦ぶこと限カキリなしおしなへて是を十錢芝居といふよい程に氣の盡ツツる迄を十錢といへこれが細工の發端ハツシにして貴賤群集すさもなき人形ひとつ拵て人間にまさりたるふりをつけ人の鈍ドジなるものと思へせ手妻テツメに成て人形ひとつを百人前にもわかち水よりいて、少も濡ヌすなど奇妙いふも愚也ヲロカみしかき筆にわかぬかまされるならんかし毎年紅毛人フランゲこゝに來て舌シタをまくもつとも近江か手柄土地の光輝ヒカリといふべし是斗カ中華カにもなき圖なるゆへな

るへし招オテけの細工物を座敷へはこびててれんのなきあかぬけをす子供の藝またあひらし、近來モツハラ專モツハラ是に成たり前マの細工六步程狂言四步なりしに今一向子供の藝斗をも見するよし見物の目肥メコてまどろしとやむもふ細工のおとろへたりとやいはんいつれにも歎ナゲくべし志かれとも見物の悦びへこの方がまされりといへこれもひとてたてて又あいたらむかしにまさる細工にやならんと頼母し

後序

嶠陽の丘ハまことに仙セン境キヤウなり戀といへハふるめかしく色といへハいまめかし金比羅ジンヒラじやといへハそのこと、こゝろえ禁中キンチュウさまといへハ三歳のちこもウなつくかうつりかへる世中春の花の時ハ容色ヨウシキにほれてよしの、里に入なんことをわすれ秋の月の頃ハ玳瑁タイマイのひかりにめて、おは捨山のうきことをわする夏ハ鐵眼テツガンの豆茶にあつさをわすれて扇をおとし冬ハ貌見カミせの蠅カキ雑ザツすいにおやの目をわすれて精進をおとすかくわすれくもてゆく程ハまばしかうちに初夜もすき軒のともし火ハきえかちに火入ハのはいもおちくほるころいつも替らぬさどめ言もきくたひことにほと、きす初音ハよりなを嬉しくてそれハあらぬとりのねもあらで又ねのことハにれんしをもる、日影さへかすむと見ゆるねふたさも又朝酒のかずつもりけふしもつるにつ、るつのるつ、けくらす夕くれハ誰まつむしのまつこともなくともつもる思ひ草おもひくらふる不二のねの雪ハいと、かへるさの跡なつかしき床の海ハのみもまつかにうつ、なき里のうハさも難波江のよしあしとなくあるし置ぬハちかると何かしひらき見てえさせよといふ二たび三たび辭ハしなんも書カかましかれハ煙花漫筆エンカマンヒツとなつてあたふさらばそのよしをありへハのべよといふ今ハいな舟のいなむへくもあらず清ナき渚サの玉もひろひかほにもしほくさかくてそ人の望ハにまかせぬ見る人ハをしり見ぬ人ハほむることあらんかも

肩カ琴キ餘ヨ情ジヨウ

解 題

一 『月華餘情』は著作年代、著者、共に不明、序文の署名者は『獻笑閣主人』とあります。底本は南木芳太郎氏の愛蔵本に依りました。總丁数は二十丁。天地五寸一分。左右三寸六分。題簽には『花月餘情』とありますが、見返しと序文とは『月華餘情』とございますから、見返しの文字を其のまゝ、凸版にして題簽の文字に代へることにしました。

一 この『月華餘情』は、南地情調を書いたもので、その緒言によりますと、全篇三部に分れ、第一は妓邑記、第二は燕記篇、第三は祕戲篇とありますが、第一、第二はあつて、第三の祕戲篇は別冊として存してゐます。即ち『陽臺遺編』(我が浪速叢書第一『攝陽奇觀』其一二五五頁)の本文に續くのであります。燕喜篇の末尾が『屏風の内へ』といふ文字で結んである所に、無量の情趣が溢れてゐるかに讀まれます。